風俗文選犬註解

巻二

へ5
5639
5

門へ5
號5639
卷5

冊號 五 歌 五十五
函 土

風俗文選犬註解卷之參

江都

薛甘分我著

去來

鼠の賦 并引

此賦以五音相通の假名字を為韻

鼠一つの形ハよそう居又よめるよりよめり其ゝさ称品あり四尺の鼠ゝ圖そうれにして大ゝるゝ又ちすちいさきハすゝよりて山椒の眼小豆の鼻歯ゝ象をつけて小袖をぬゝふゝく耳ゝ木の茅のめゝふよ似ゝう尾をきゝうて錐のさゝやとかのさはゝのてん皆服の色よめゝくゝすゝくゝこゝくめ深おせゝう其行やあゝて昼隠るゝ常よぬすみとゝて身を養ふ体まにくむ〈きゝめゝ一つなゝう乃賦を作りて曰

山の井ゝ都て正月ハせのつゝよかゝるゝのゝゝ多き称すゝを嫁ゝ居ゝよゝゝゝ七ケ日のゝ嫁ゝ居ゝゝつゝゝゝ

明るゝ朝乃のゝに小ゝ嫁ゝ居　其角

光陰道行　書　其角

妻戸を明て出るゝ人目をかゝん里あるめゝとかゝちゝん雅ゝ

扇の要よりむすふおもひ々着の墨ふのうらみかゝせし二見成伊勢物
神明の花笠きゝやうかるかや小車の我からものに狂ふとハかの補成らきの山
つま其取ハ定しみる帰月海上よりかれ女の泪よくもるむら雲ら雨を
起して鳴神といゝて弁をさけてまし巳の日の祓ゆふての誓(チカヒ)をくらむ加
茂川やはく瀬よりつけて足そろへくられ色つきてスワトントンとおそハ去よくす
くちりん杖の下よりも獣(ケモノ)となりし辰をおくりて世の中のうきくるみをおもハ
ざるこそまするなれ又逢坂のせきありて一夜をゆるせとまる所しも百枚
とかくかよひ路をせくるむる声ハ涼草の中よこれハ狗子草(イヌエノコクサ)はえ生ひし
をころりとひよう苅藻(カルモ)の床とらや伏見の里よ鳴くる蛙ら居の心のう
ち又こひしとくハのくさりまで油地獄(チゴク)よつきのまふ

鼠なや そなはしまむ 鳥こかり　其角
引つれて 小松くゝる 猫つまの　ゝ
神鼠の 尾をくわへん 出筆　ゝ
かとしまに 鳥や 猫つまり 引きさん　ゝ
松なりで 穴く 餅 川 猫つまの　貞徳

鼠とる狸乃猫となつかんなり　吉水
顔出して鼠あつまる枳宮ら卵　百里
ぬくみえとりゆくよ鼠の鳴枳外　貞佐
梅ら息子猫つまの髭のくらつくむ　立志
とりよみハ鼠も引はなし宝一つ車　その女
夢逢其の林葉にかよふ鼠ら子　西雀
蛛らくまら鼠の足らさよちとり　其角
松川をあくまの見つき鼠の卵　正忠

二月鼠の穴をふさくつくし浄らいふつをおもへ家を居て人をおそるは
足のうらに蠍(キツ)捨けり㊂油ものむ世の酒によしりれとろうし沈醉(チンスイ)をんも㊃
栗をつくりしたまをそこなふ性またいかに㊄大棗(タイソウ)をかむ牙(キバ)にあかれハ婦を生れ㊅
あつしきを食をちらして男女の中をさまたけ㊆あやしき菓を作りて源平の乱をまねく㊇

あやしき菓をつくりて　源平盛衰記十六
入道の世のすえよりてあさましのさとしありき坪の内にひきくして立
開きたるるの尾よ鼠の巣をつくりて子をうみたりそあかるる中黒

古文のさたに平家のめつしの端相あらはれ迷ふ人道の衰去をしらず八
平家都を安堵すべしといふ行ふるまひの方へ向ふ八南なり風のうる
まきつよのうるをそなるまきに風ゑ巣をつくせるをそくませこうま
てにてこく上ちされハるの中の方ゑ高ひすきをひ上りて午の南の方ゑ
おハする平ゑの御相を都の外ゑ追ひ落ゑへき端おこるなり
和名抄鼠穴屋の小獸類多きものなり
晉書ニ大康四年會稽の蠅及蟹皆化して鼠となるとそう
仏を焚つひて僧人のさめゝゑ引ちれいこにすえて書を焚代の宰相となるべ
神佛のうきを尿糞ゑ汚し奉る草の根をゑむ月の風ゑ僧俗の眼ゑ入る
僧人を風雅ゑつるの文ゑの多書を焚ゑ秦の代天下の書を焚ゑ
我くのむ仲の根をゑむ風ゑとおるへ八月のうるきゑ　後拾
みくうの意ゑをくうのの風きまるをくうのうるを花ゑよ
つくゝけうあやうきゑとおもへ夫人のかゝときやゑ方本燭をもきく吹矢をやうけ
繻ゑあらゝ往者るるやすゝれけりき城をゑのむゑの軸をふせいまゑ殿ゑあゝ
者ゑの穴ゑをゑのめてゑるのつゝむ愁ゑする　つくゝ　拆ゑ障ゑのゑり早業ゑ

ゑり瀬ゑるるをおるのゑ仏神ゑのゑていう年の馬ひを手ゑん虚空して仕合東坡ゑ
袋を逐ゑゑゑ生捕ゑるまゑゑに張湯ゑ文をゑけるん或ゑ鉢を頭ゑさけゑ
児童の毒ゑ風ゑゑ或ゑ筆の用ゑ髭をぬゑて老の悔を消せり あやまりて
盈風とあるつゝれぬれ風と笑ひ さゝる吹矢ゑくるゝみて人の為ゑよろこれ
めるゑ ゑゑかゝきを焼風とゑうて狐狸の命ゑゝむゑて鼎ふゑうれ
東坡ゑ袋ハ東坡ゑものゑるめゑ袋を童ゑゑ指ゑる画ゑるゝゑをゑハ
ゑゑゑいひめゑるゑ仏一族人生のゑゑゑゑゑと風の上ゑかきゑうて文ゑゑゑ
り生捕と八生ゑゝ敵をゑふ捕ゑすゑて殺の意ゑれハ生捕ゑふゑゑり
形の為ゑ敵ゑゑるを敵猫の風をゑる城をゑる為ゑの意ゑり
紫水巻二　張湯　巧詐　張湯兒の時父の留生ゑ肉ゑ風ゑ
とゑれ又湯ゑて湯をむちゝつ湯風の穴をゑすゝこれをゑゝゑの
つゝの湯ゑをかきゑるゑ風をゑゑゑゑゑゑ
つゝゝ仏ゑるきをおゝゝゑゑのゑめゑて信ゑいやゑれ百ゑのかゝきゑ
甲ゑを添て年の號あゑゑのゑゑし玉の春ゑ加れハゑのゑの出賀あり
初ゑの日　小松引　ゑの日の松　公事　根元ゑ

むかし人こゝに出てこのほとりすまして小松をうゑる也朱雀院園城院三条院なとの時より代々ひさしくなりぬる也中ごろ院のこのほとりすませのひるハ寛平二年二月十二日のすへ路をは車なりしか紫野近くなりて上白三ちゐ

ひるまめしたゝうた左右の大臣以下皆出衣して殿上人も布衣なり幄の座をまけ慢をうめしたし小盃をとりてかはらけ菓物あひつ接ぎ

やものを奉る人こゝ和歌を献じ其時の序者を平の兼盛なり

子条といつるいつれの長者の傳へうけるのかけを友ふるまこと海嵐と加ふ秋風の尾花の末を書とふ鶯八田嵐の化しくる也爲時のくきをハいつもとるなり象といつる獸すかつ怨曜ぬる麝香嵐をつくゝる住なれてことゝるむる行ハかつぎ姿のあやうるハ婚人の嵐をらとゝるそどこのてるを七郎とハ中ハ夫婦ハ夫婦とハさうやきすてのなるそ

大福ゝ小福ゝ時と井日嵐と春のり月くるゝ十二のゝをとむ誰ゝ家ようとつくはん寸ゝ多出て福の神よや先せらん海かゝれ里ハいつるのなるまゝむさし神の嵐宮よや出雲の境の嵐ゝせきうるゝ信濃の奥の嵐宿るゝ目あ我ゝをとゝて加ゝめの世をむさるゝうくゝ海んゝをあてはぎる窮嵐かゝて猫をかむ志あるゝ

三井の頼豪ゝ千足のいきゐひすゝゝ高を返るゝハ怪きゝさゝゝ

子条十一月　上子　田嵐化して鶯ゝる春

嵐のかゝ里ハ述異記ゝ嵐ゝとあり嵐の嫁入ゝ寛永の比の踊ゝ

条ゝあゝて今ゝ見女のゝてあそびゝ其踊あり

福の神ゝや先せん　ちゝ乱傳

御祖ノ今下大宮寺庭ノ神ゝのゝたまゝく須佐能男ノ命のまゝ根ノ堅

例のむゝまゝてゝかゝのゝひ其大神ゝゝゝゝひかんゝとのゝのゝかゝ

みゝゝのまゝ〳〵須佐能男命のみゝとにまゝるゝゝしゝハ其ゝむすゝ

須勢理毘賣出ゝて中ゝくひゝてみあひまゝてかゝゝ入て其出又

にいゝゝるゝゝき神まゝるゝとまゝゝゝゝゝきかゝ其大神いてゝて

こハ葦原色許男とゝふ神ゝとのゝゝまひてやゝそゝひの今其蛇の

室屋ゝ福ゝめゝまひき其出書すせり姫の今蛇の比礼を其ひこぢ

ゝさゝけそのゝゝまゝ〳〵其蛇ぐゝんとせハ山比礼を三度ゝふて打拂

ひゝまゝてゝのゝゝゝふかゝをゝくのゝゝゝゝ蛇おのゝゝゝゝまゝ

ゝ故ゝやすゝゝ祓ていゝゝまゝひきまゝるゝのゝハむかての室

盛なりけるむかしをむかで蛇の比礼をさづけてさきの如をしへのひし
あらたなやすく森をまひきまと鳴鏑を大かたにて出まて其矢
をとりしめの母よかれ其かゆるへすのみまするはちりまて其ぬをとやき
めぐりしつくるいとん不をよせさる間に鼠来ていひかる八肉八ちらく
外ぞすぶくかくつふ中もまゝそこをとふとし八蔵入りかくれしるに央ら
やけるぬくこに其羽つみかのなりかふらをくひたちいてきて又
てやすつりき其矢の羽らその鼠のなる皆くひつるき

三井の頼豪か手足の労ハ

白河院皇子まりしまゝ三井寺乃實相房頼豪あまりに作
せて皇子降誕の事いのり奉るしあるハ賞ハとくかなよう也と勅約ある
かくて皇子御出産ましくれハ頼豪に賞をのぞむへきよし勅
定ありしに三井寺に戒壇を建べきよし申出けれども山門乃
衆徒とくちて勅許なかりけれハ頼豪うらみて山門あんハこそ
我か意をも叶はねとて飲食をとゞめて其場に入て行ひ死し祈り
出まゐし皇子をとりころし悪霊鼠の鼠となりて山門の聖教を

くひやぶりけれハこれハ頼豪か怨霊なりとて上下おそれて寺鎮めとて
りけるやうく鼠あまた生来てかぶりをしきんとすなわちいけるよりまるあれ
悪霊をなぐさむへしとて社つくりのぶところをつくりていはひまつる　ねぞみ
まつられける

なつかしや月の鼠乃究まるひ　止亭

年一おきさるりはさし日の鼠　嵐雪

寄大黒鼠

亭の鏡ふのうに出て白鼠　琴風

卯の花に隣ありきやぬれ鼠　調竹

桜と花と連歌にせめそむにあぬ来の鼠の心よ

花にあぬこれなるらひの鼠乃巣　蕉

声くと声鳴かりける葉の桜つゝ、

またふらん苗代と乃田の鼠　氷花

頼豪か弁のなにつくありけり　許六

信る楽

老鼠

西寺のあたりの乞食乞食を乞食をもてつけきてつけきてつかはしよ
やせ物よやせ法師よやせさんん物よやせ

毛詩曰　人之無禮亦如此胤不如速死

花つゝ集のせたる胤の說を用ひ他者のてをるもちるる
ようかくかくして文意明らかれ全文をあく

胤くくふよ出て多くかくる者居て人を為すに八足のくらゐ城
おけらく山椒の眼小豆の鼻歯を歯をつけて小袖を着あく
年ら本の家のめくつる仏ら地蔵をくらへら毛向く大東をかむ
口毒あり尾ゆて雖のもやとるくハるてん猪眼の色るめて
くすくるくくる深出せり被うかりら染のあやるら嫁入乃
隆そらるるん筆の用よ髭をぬるくハ老て後の海のかんせ
のくらつまるハ蚤胤るれいるくくつくくはのいくつをある
ハ油を呑り世の酒よひくれる隆る酔ふくとくれ雲を
くくを筆をやるハ法あるくるかくく貪婪の筆よつくを行あい
まるるれくよ文をちくして男女の中をとあくけあやき筆を

つくて深平の孔とるぬ行を論てう偽人のくめくるれいてつめ
て書をやく世の宰相とろくん神佛の貴きる尿かう糞を汚すふ
地獄落くのくるみ筆てきるや月日の胤とすあるそやくるの加
らるんつくくれ多の貴きをおをハ斗を形ちく胤を心猛りれる
下坐を立り百姓の加くをる甲子を逐て年の男を阪のふ春ち
かくるれひるを日の祝あるる楽とれいつの時よりそやりん唐の大
和の歌るるるれ山法海系やりはのかけるすむ海胤秋風の尾花の末の
ゆるくくる我行の人を乗胤と傳へ伝る麝香胤うきめ丸のつくよう
乳よ行ひ天井胤を雷くるりとこのこあを七部とハ中秋篇と春夏篇ハ
月代剃てのるるくくを大弱くくふ十二のるをくみ訓くく
サの扇の骨平雛の家よりつくくはんの白胤系りて福の神のつくひ
さんるるれひくくはるあやるきを加をハけくき城をくんてこるる
とる融を多せくく謀らあくくを為て誇くまうふ為ようんをを中
空よおをくれくあるき姿をや番まをるめ吹天るあくくるくて
るるすのハあくくゆ胤ゆ胤胤とるをちるまつ生成ら鈴を頭よかけ

[illegible]て[illegible]る里の[illegible]文毋の[illegible]西ちの老[illegible]をんをつんつけき
つんの法師よりさん師よりせ友達よりもやさんてつよらるやうら死
て仕舞と東坡の俗を述べふとなまりの張湯の文を少我さへ無しきを
狐狸の命とんとて燒亂とるるいと後まき姿をの折たう障
るのの[illegible]の[illegible]おるの[illegible]かりて長き別とるめ共書といひ
るとつひいう牛のおりひをうすんん内のかんん里ハいつんのるそうそむさ
よ亂穴大比叡のかこうるるうのとう内ぎる頼豪う翁ひる女意と
けかく猫をはむ[illegible]とく[illegible]も不器ちくハ成内彼おそろしき睡士を世
にお任せんを西ふうぬ俗世を

西坡翁を[illegible]つる一雲の亂とも　去集

いつをむかしの移りびくつりく義を法師ちゃつくんれハ相亂ヲ
をくあらかくいるるのとに一ちるるのけちろんまをを比集よ
おきつをを作るる

旅乃賦 并引

比賦書由うの塞まハ甲洛記行としてお文あるるよるす

詩　六八

風狂分う旅の賦 并小序

五拾年の行脚よ一點の雅もかくむくるハ西上人ひとりの上うの蘇
氏八弟の遊旅ハ皆不平の上乃流浪ちうう古くも是ちるも此な
ちをたる風雅のさうひを出して方古の情を述べう我風雲の客
るるるり二十四あるの附ら不破清見う明月よ靴をあけ土岸の雲に
顔をあかくるる五月ちりむさし上野を見て雁井の雲をまるハ木曽
後の[illegible]ちを入りを六月よるを東西南北ちる奔走するの合せて十一月
ちり水村山郭本のり山のくするハ[illegible]後左右ハすのあるうかのくあ
朝[illegible]とすく通ハ甲斐の猿橋を見て上の蔵詩よかりスもやある
の川音の四うさに枕をすんく打下よ先達の記行をひきて後の
和歌古戦場の由来をくくめて旅行の袋よくめ足袋はきの破を補
ひ兵杖のふをおろして枕の上よかけう我むつまるお義よ別よ行
未おのつのうく心かきあるるゆくえよはるの一声ち孚雪ち

[illegible]月[illegible]なりて[illegible]市より[illegible]人足を[illegible]に首途をすゝめ[illegible]八[illegible]日

六日武江の館を退

[illegible]の[illegible]子[illegible]毛の弱乃[illegible]

日く乃文章ハ[illegible]る記行より[illegible]て[illegible]ともむ[illegible]名[illegible]ところ[illegible]の[illegible]

おほくハ[illegible]事の[illegible]より出ハ[illegible]ハ[illegible]をもらハ[illegible]ハ[illegible]と旅の情の[illegible]

あつめ[illegible]ふ[illegible]賦つゝ旅すゝ[illegible]の[illegible]すゝめよかきあつめて[illegible]

送る今のつゝてよ[illegible]ハ元[illegible]の[illegible]みよ一列よ[illegible]

張ら風雅の花風雅ハ過客の[illegible]西行宗祇の[illegible]紀[illegible]誹諧の情[illegible]

西行[illegible]ハかゝ[illegible]の賦又西行の贄よ[illegible]

昔宗祇の播[illegible]山寺よ[illegible]に小鶏[illegible]

[illegible]する[illegible]よ連歌の[illegible]鶏[illegible]

代[illegible]

世[illegible]も[illegible]　村上天皇御製

世[illegible]　後村上院御製

世[illegible]よ宗祇の[illegible]　宗祇

[illegible]

同一[illegible]ハ則り人義[illegible]　貞徳

宗祇の[illegible]と[illegible]ハ宗祇法師と同一[illegible]

[illegible]を[illegible]宗祇[illegible]生涯[illegible]て[illegible]を他の[illegible]

我[illegible]白川の田植[illegible]を中初め奥羽の[illegible]をめゝり高館の[illegible]草に兵[illegible]

[illegible]あつ[illegible]山の[illegible]ハ次浦を訪め佐渡よ[illegible]天の川よ初秋の往

[illegible]より晩の二見を[illegible]て七[illegible]三十余程を吟す[illegible]良の[illegible]髪の力量

を感[illegible]て一鉢を[illegible]

奥の細道　足かゝ[illegible]

利[illegible]

[illegible]良ハ河合氏[illegible]て[illegible]立[illegible]と[illegible]て[illegible]の下[illegible]よ軒を[illegible]て[illegible]蕭

水の[illegible]を助く[illegible]松島象潟の詠めよ[illegible]せん[illegible]をよろ[illegible]

[illegible]の雅[illegible]と[illegible]立暁[illegible]を刹て[illegible]深[illegible]をか[illegible]

[illegible]て宗[illegible]依て[illegible]山の[illegible]あり更衣の力みてきと[illegible]

[illegible]良ハ服を病て伊勢の[illegible]ハ先[illegible]

[illegible]　萩の[illegible]　[illegible]良

とかきおきしうりの名ハ球るの倦〻雙兎の別て雲ゐまぢふの如し

くさぐさや立身潟をむ　笠の露　翁

大坂の庫より入ハ百姓も伊勢なり寺合越人ともに如行あるよ人

一日芭蕉庵をとゝき給の雜後つゆふ時るよ旅十体の画を加て賛して伝

某らうとめよ意す其風雅よりめり俗談をあつめ狂賊五徳を以完かしと

夏の細〻の草まくらの類ふるあり

陸奥流のはしめや夏草　翁

早苗とるよりとやむ　芭蕉

陸奥福島の山口村より庵原石あり土人の説よあ人のつる昔俗あ

寺のふの山より草庵をむすひて住ふり母あり家まゝ〻て世をわるものか

かりに狂僧庵のみきりよ石あるに千種のかゝちを石の面ありて丹

青のまゝて深細布に似ゝ説（キヤウナウ）麿の綾服（アヤ）呉服（クレハ）の衣とふるる

一説其草のかゝち参差（シンシ）とみれるあるやすすとふの山深こいめ

ゆしゝせの人ふを翠ふ價よかて其代ものを油して母を養人

るをよるこひぬるふり星霜ふりあきめれ石水中よりりて綾（アヤ）の

紋らせめるる者ゝ色の形とたる今に残やしゝ古山里の田ま

奇なる石の切をしるゝ伝て石の面を書のまゝて磨ハ書ハ人ろ

かけるゝ伝るよいつの比よりまんるはりる人をきゝひるけく物ゝ

春の時よいゝれハ都鄙とるくあつ色者て書の筆をかとめて石を磨と

すむる者するゝ里の賤耕田の荒まんるをかのみて石をしなハ

人名よ三十人家のか者よおぶせてゝるる池の中押倒しるまん山

のあゝゝおるよあるる故にやゝ子細ゝ水中へ伏めゝ其後自然ゝ

水絶て其所地ゝるて石の像よかゝき水の流ゝ逆ゝるおめゝくま

ゝに細布を深りるゝるるゝ石のやいゝ人を庚申ゝゝう

旅十体の白ハ蒲阿全集よ旅十体の白ゝて冒あり又蒲のるゝ蒲

八体の白ゝて七白あり蒲よ十体の白ゝて冒あり八ゝふるるやるをのせさんハ新

かゝ一四ゝとゝるゝとゝるゝて後の山ゝおを伝

旅乃奥まゝ深ゝ春衣　許六

ゆくゝる　のやまゝ迄らの　油あみ

酒買て　旅寓しを　玉まつり

五月雨やまたぬれの大井川

名所八作　　松尾宗房

秋や須广須磨や秋しる春日和

貝寄る風の手ふや和歌の浦

行春や吉野とあれ乃筏山伏

星合の中や踊なん竜田川

松島や雪の白地の良配

嫁そへて鳴かけしる雉子の聲

八雲や天のはし立このの

万季丸

掃もみぢやめちらばらじ草枕旅ねして居るとはらひて

仙覚曰人の物へありきける跡に家の庭はきつる掃もみぢ云

るなりと云旅行しける跡の庭を掃ることいへり

旅人にまりもそへてむすびきそやく筆掃山の秋ぞ

俗以盗曰頭利(スリ)一蓋麗(スリ)ハ竹篋(カコ)ニ以為行旅之具一若盛(モルトキハ)ニ水物ヲ一

竊(ヒソカニ)渉(モリ)去(サリテ)而麗(スリ)乾(カハク)辟言(タトフ)ニ之竊盗(セツトウ)ニ

早苗にも我色黒き日数哉　蕉

奥州へまかりける

実に名のみ聞し名こその北を過　宗因

旅店のさま上段に書院床飾菱のすみし火のつき火燵にやくらかけてつぎの

入湯桶かけて居る底に小町のさかるハおかべの跡なりとぞ出女の壁かける

ハ春秋をさる根太板敷ハ露てすみし道具とし天井複ハ雨のもりぬきハ

つき鉄行燈らくらく紙のまとん色の心といふるに燃くり銭貴草鞋賣るにせ

かまれやかしくに枕をかさぬけ心よき床入ぞるなるさしの声に富をかる出立に

七ツといひふくめるに旅人も亭主もよく寝てあけ方ておこめつるもなく

夜のつれの上をいそぎ私路の脇づくしをとり駕籠出てもどきるさしつゝみ

合一僕の跡にさるを旅の足し宿の明るにつれの男をおこし粉打と申し

てお茶をのみとるに物とし入湯の一番に入さらに何なるそやつるの抹楽

なるのはつくとおほゆ　世旅やさのたるにあきくる旅のかとつる此情に

かるへく

海道の賣物は餅酒のみにあらず磨針峠の餅をくるハ未来始
王のおまてかきめをくるとつゝり寒天は冷素麺をすむるゝ遊客の
茶屋餅酒のゆうゝとうえんゝる八見付の長ゝ卯の葵ぬきくハ本ゝ代
張ゝゝ銭を弁ゝゝみ銭の看板ゝ筒をかけゝ昆布の田楽ゝ
行ゝくゝゝ

茶かけ子春の宮相や宇津の谷
舟川の上る旅人の情ゝかゝゝ五月の大水をかり借ゝ形ゝ出
入おのゝ草の戸ゝゝゝと首ゝけの借銭を納て去ゝゝ見をつるゝの八
鳴田令谷の賊ゝり水の流涙を何と文川とゝゝゝ八大きゝ細長ゝり
天竜の中の船ゝゝ人足を雇ゝまゝふ雇ゝ人ゝ股ゝけ入て者を肩ゝかけ
て行あゝるゝの八百九郎なゝして舟賃ゝ立旦那ゝ銭をかゝるゝ八波
ゝ師の精也る士旅人奥ゝ輕重ゝ日月とゝゝ一盃の酒ゝ街然乃
茶ゝとやゝしなゝ一生を漂ゝ瓢ゝと寸ゝて雲竹の号をかゝゝ炎暑
のゝ日ゝ玄ゝのゝ日ゝゝ格の寸ゝ下ゝ移ゝて蝦の都ゝいゝる路ゝ飲食

坐ゝゝ土のめゝとゝゝ仮ゝけゝ
吸売ゝゝゝゝ銭ゝ年の定ゝ納め金ゝゝ八ゝ月日ゝ出賃の季ゝ定めけ
一ゝせの者ゝゝゝて世ゝゝゝ人のゝゝゝ
ゝ八せをゝゝ遊ゝゝ仏ゝ

生ゝ山ゝ山ゝ八ゝ頼やゝゝのゝ

宇津の山のゝゝみゝゝ宗長法師ゝ記行ゝ
大永四年六月十六日不二のゝゝゝゝ立ゝて宇津の山ゝ雨やゝゝ
雲ゝむかゝゝ者物十ゝゝゝ八ゝゝゝゝ十ゝめゝゝゝ
すゝゝゝ

末松や宇津の山 共角
十ゝゝゝゝ解ゝゝ宇津の山 許古
十ゝゝゝゝ八ゝゝゝゝ秋の風
物ゝのゝゝゝゝ細ゝゝ
山ゝゝゝ雨ゝゝゝ宇津の山
春三月ゝゝゝゝ

海道

其疏を柳にかけよ十団子　桐葉
ちる楓　腰にさけるや十團子　宗因
ゑこまりなるかも　くすに留ぬなり　尋行
極月十日西吹ち坂くのわらべに
いそしや足袋売るに宇津の山　其角
今我のまつるも餅くふの名ハ十團子のむかしのさまをいへるまで一
粒子に十ツすくハせ旅人をもてなせるとする旅情まで一句を
なせり小粒になりぬのなりてそや元禄のころも今の世の十團子乃
さまなるが見らるや今の十團子に数珠といふものかくちいさう
名物のかくさまにかはるもの十團子のこさもあり此すべて土産物
に仮て其かとをハ也しむて自他の力にてなるもののなり餅とこそらす
べての名物て其子其外くさりのものをつくれる　ほ名なり
野長明海道記　国部の里を過てなるた此ハ宇津の山にかかる此
山ハ山中に山を越するに切けりつるにる山より碧岩のかかる和
なるして嶺を立翠嶺のうまに翠蘿てつらくれをつく　腕を攣のお

以西を胸にいだきてやりくるのなれハ行盾祖の服にして流れて草衣か
さなとしつる懐中の扇をとりて微風の扶持可なりし

十團子　闇斎

大極十團圜　都來是一貫　令此粉團子　誰成茂叔晝
一二三四五六七八九十　貫得天地數　無過無不及

遠州天竜川を西行発心集にあめるかのわたりとあり竜の梵語
那可とかへり長明が海道記にハ天中川をわたるとあり

よしさらハ名を浮木まてわたらん　あまつたらの中川の水　長明

異聞集　淳于棼酔テ夢ニ入大槐安国王曰吾南阿郡屈郷
為守凡二十載使者送出穴遂ニ寤尋古槐下蟻穴乃チ槐安
国又一穴上ニ南枝既ニ即南阿郡也

流浪漂泊の上にこそあはれなるためしもあはれ独坊主ならあやか
かの用所に二あらとめが月あのあとみられの夕ぐれに情深きある
ら長おくさき布子りてぬれるものを焼火にあぶるあるハ三宝荒神
といふもののおもてを拾て去りつくく足を休めし極めの札場より送おろ

さるほど都てのくぬおよう股をすゝめ東方のへよ杖を携へてあゆむつし
ところなくハ人皆病死の到来ハ時をまたぬ醫療のくすりけらく懐中
のもの薬も常く急病をふせく巡礼廻國の旅路はよるなれ跡しれ
目ぬる所薬は道をもさ老僧のあはれみてつ下に入おとろへかさなり終よ
黄泉の下よ趣く加わて何所の土となるむ跡をしれ大はりの中に
こえて年のよかひ衣類のはやうを小札よ志るされて何國のいかなる人
と人名も志られるかわらず園部の辻堂の笠よ經文をよみて同行
の別を惜しすゝき川の念佛を尋て我子の古墳よのわらへ集古往
の人旅懐の情をつくして風雅の腸をさらしは能因も白川の歌をよみて
二条みちのくをおもむき不二都鳥の句をかしめてすゝやに旅へかつ
つる者も貞室老人なり東海道の一筋も志らぬ人風雅よおぼつかな
きといひけし翁の声耳の底よとまる

能因か白川のうた

都をハ霞とゝもに立しかど秋風ぞふく白河の関

と見るを我ぞ心ほどよくよみたると思ひ入れたれハ家為都よありながら

此うたを世の中よ出さんずるすゝ念なりとおもひて人よも志られず久しく
こもり居て顔の色を黒くせんとて日毎よあたりゐて のち陸奥
へ修行よ出てよみたるよしいひて此の歌を披露せられけり
山家集 みちのくにへ修行してまかりけるに白川のせきよとゞまりて所柄
まやつねよりも月おもしろくあはれにて能因か秋風ぞふくと申けん
おりいつなりけんとおもひ出られて名残おほくおぼえければ関屋のはし
らよかきつけゝる

白川のせきやを月のもる影ハ人の心をとむるなりけり 西行

不二都鳥の二句 安原貞室 初名正章 一嚢軒と号す

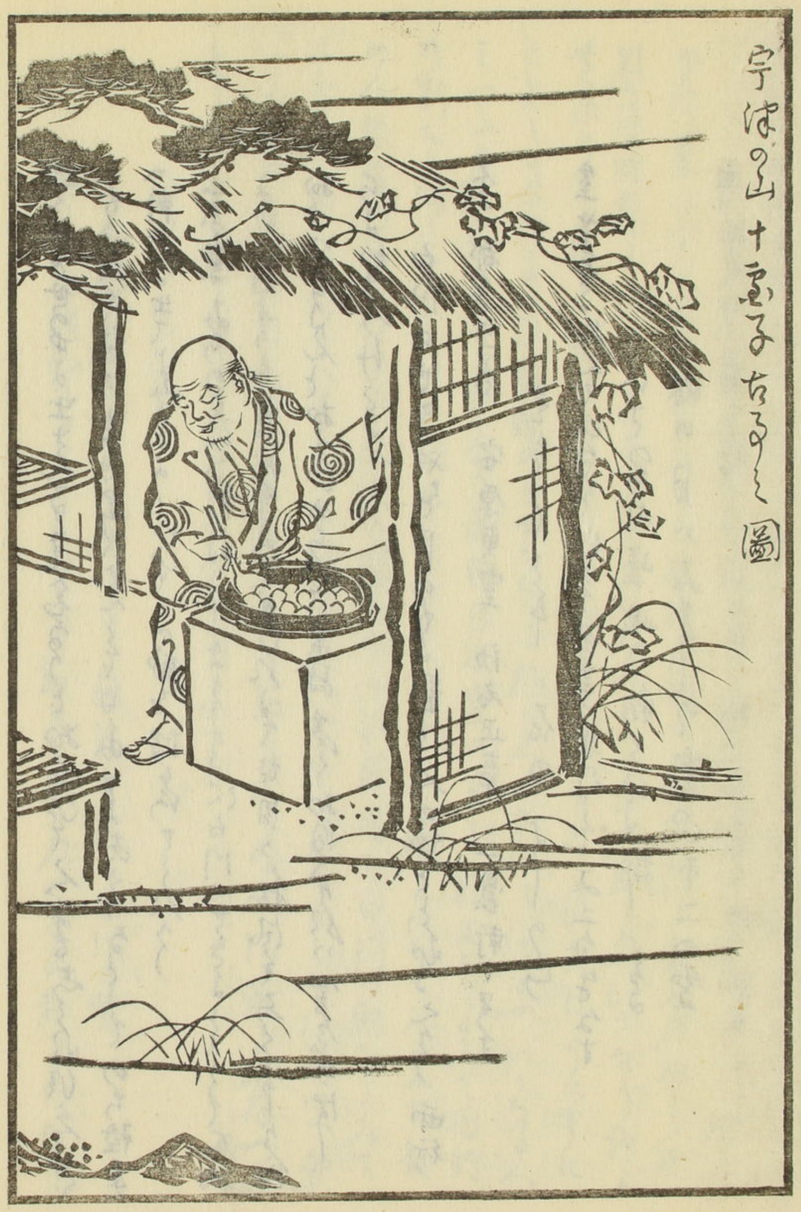
是〱と斗 花のよしの山

室嘗よれんて此句をほかり其年東行して二句をなす

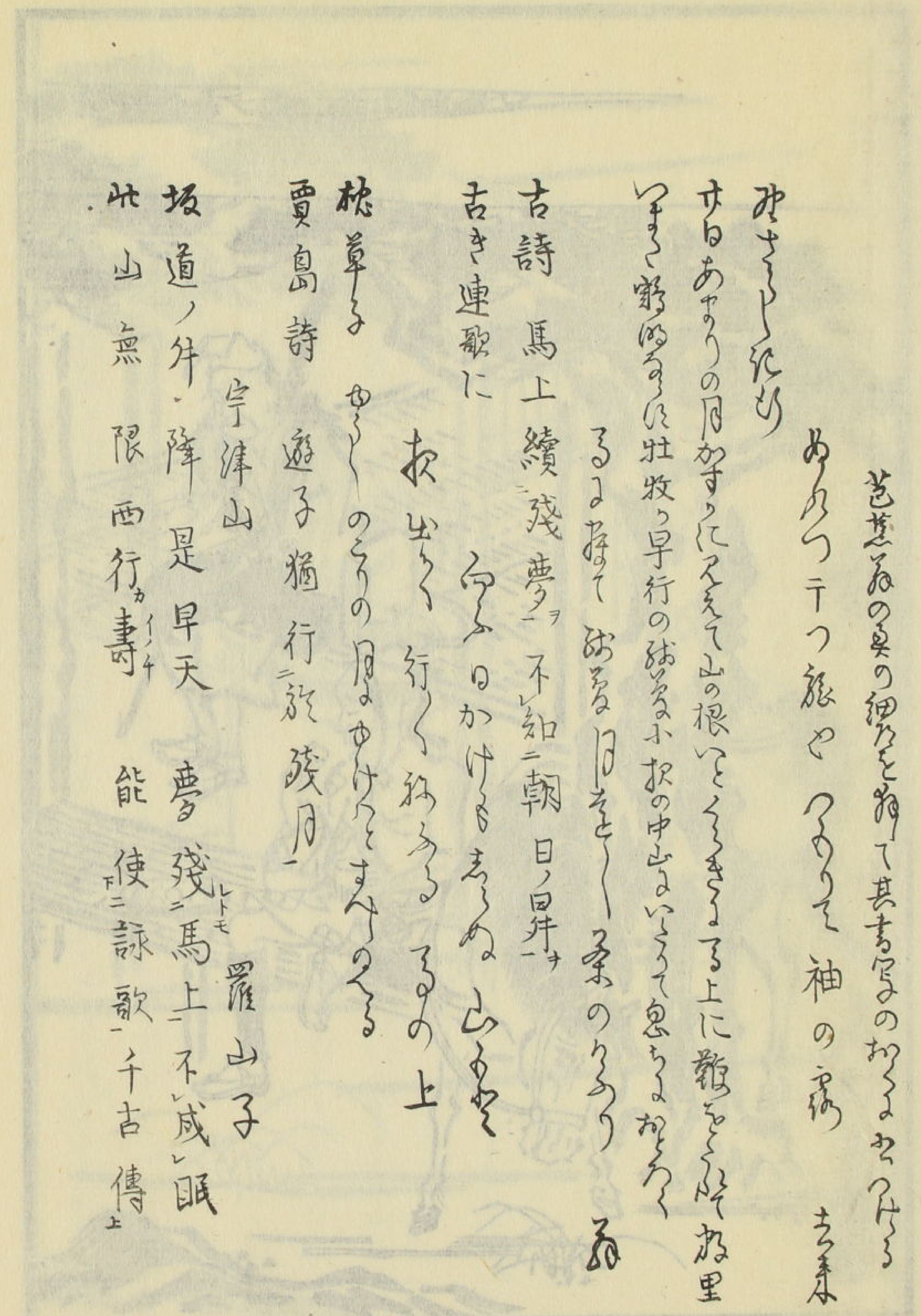
いさのぼれ嵯峨の鮎くひよ都鳥

跡の月ハみよしの雲や不二の雪

白河おほそらく章をほかりと此三章を掲て余当集を焼と歎息すること
しくゝり


守はの山 十意ろ古るゝ圖

泉流畫



芭蕉翁の奥の細道を拝て其書写のおくに書つけゝる　志来

めくりつ旅や　つゞりて袖の露

のさらし紀行

廿日あまりの月かすかに見えて山の根ぎはいとくらきに馬上に鞭をたれて数里

いまだ鶏鳴ならず杜牧が早行の残夢小夜の中山にいたりて忽ちおどろく

むまにねて　残夢月遠し　茶のけふり　翁

古詩　馬上続ニ残夢ヲ一　不レ知ニ朝日ノ昇一ヲ

古き連歌に　向ふ日かけもしらぬ山もと

秋出て　行く秋みゆる　馬の上

枕草子　ありしのこりの月をあけてすみのぼる

賈島詩　遊子猶行ニ於残月一

坂道ノ牛ノ降是早天　宇津山　夢残ニ馬上ニ不レ成レ眠　羅山子

此山無限西行ガ寿　能使下詠歌ヲ千古ニ伝上

揚揮豆ノ賦　毛紈

赤小豆飯の能は一に俵に納り二にはまりてあつかてをよう
あかの飯名を赦する春の粥には瘦(エヤミ)をのぞき卯月の堂の牡丹餅ゑんがき名目
を累して今様のいきる也ハほとくとのさびらかし歌よむ人も秋の夕への
あはれなる色を好みて萩の花とめされてより誹諧の人も隣あるはともよむめり
饅頭(マンヂウ)の唐饂(トウヰヒ)めく時にてみとをうつれ学のつまと物識のこびる時ハ赤飯と
もいふ也深更とハ理屈人の名つけるおもむきて　あつつまど解く謎なるべし
蕪蔞(ブロウ)亭に君臣の義(キ)をつくし七歩の詩ハ兄弟の情を述ぶ従弟煮(イトコニ)
不死(フシ)汁の名もいつれの世時より始まりたる由緒をしらねど又あやかりの升に
かゆめする張鼓の氣につまりてゑかれが中の一つの遊びゐり嫁となりしハ大きなる
きさらひはまうく逆なれハたやすくにすくなる堪能をおもうふとぞの料理
に煮ゆのめるハいかなる小豆飯の内分別かおはしなむ

なつ春の粥するをえやらそのそきき　誹諧秋式

正月十五日粥の木　粥杖　註　かゆを焚あまりしをもてちいさき木を
ところらく袖にかくし持て女の尻をうつるハあれまうりうれにあそり

つる女らくるむ　小豆粥　祝ふ　加ほら　紅調粥

饅頭の唐顔めく　まんちゅうハ長寿寺東鑑ニ達長寺

のるといふるくるに十字とあり十字を終ふ又十字を喫すと出くり

うれハちきるる饅頭を十文字なる庖丁を入て四つるるやうるく

るれを十字といふ

謎も古よりの古所謂廋詞ハ即今之隠語所謂謎也

瑯邪代醉編

用之字謎　一月復一月両月共平辺

曹子建

七歩之詩

煮豆燃豆萁豆ハ在釜中泣本是同根生相煎何太急

イトコ煮ら今もする竿牛房人参なとへて小豆と煮る煎也

不死汁ら不死ら竿豆をあとらくるかと小豆ようけるう

あやおりの弁ようかるあよ　あやおりハ綾織なるう

職人つくるこ合

月えつくるこ　敢下のこきるこの弁の扶声のすみつるう

文操上畧　かい餅ノ説　陳素

花もよりの菓子桃るるにおしひるあくるるる而る例の小豆を

ゑるれハ花のかるちる牡丹餅とハいくるるを今の世

の内裡上臈ら萩の花ようるれとるるハ餅屋といひ赤飯ようく

るを多のかるちる極れハ白のるるひるるて宮城野ともいふる

るるすてハ一代の別名て雑煮の芋もようるれハ伊勢の浜

萩ハ毎とようるるみを第一ひる山寺ようさるりてそこの和尚の

もてるるに山伏の者るるをとるくるるいにとるるくおるるる

かのからるちるそ作りハさるるるき煮るるるあるん　一下畧

大師讃　大師粥　十一月廿四日　傳教大師のるる

且つ日ハ小豆粥のるるを摺鉢ようる入摺るる木を中ようさ一八基面の極る

作るる式ら下さるるおらるて出るくるるくの弟あるるる

臘八粥　るるも小豆粥を煮るる　十二月八日　出山佛の日也

張鼓のあるよつるゝく　倭漢三才圖會

非鼓　串鼓　うつつみハ鼓の略ゝてちいさく其柄をもちてこれをうゝ
ちあるつるゝ小豆ゝつゝこれをおすのゝ今ゝ世に移ひよあるゝ
鼓のちゐゝよつふ　古く鼓といふゝら今の世の大鼓のゝゝて今鼓ゝ
いゝものハ大鼓の中の一種なり和名抄大鼓とあるハ今の大鼓なり世
の中の大鼓といふものハ古のつゝみ也今ゝ雅樂ゝ大鼓といふ物ハ
おなつゝみなり又猿樂ゝ大鼓小鼓といふものあゝをハ今の世ゝいふ
つゝみの中の大小あゝこれら古ゝ今ゝ名のかゝる摺鼓ハすりつゝみ鼓
鼓ハフリツミ腰鼓ハ三ハツミ又クレツミ今呉の樂ゝ用ゝるゝ鉦鼓
鞨鼓なとゝゝゝゝ和名抄ゝ都ゝ美ハ都ゝ曇の字の音也唐書
礼樂天竺伎都曇鼓ありゝ白孔六帖ゝ都曇答臘ハ本梵乃
樂なり都曇ハ腰鼓ゝ似て小なり答臘ゝ蜡鼓なりトゝレとゝ
もゝフロトつゝ其音なりつけるゝゝ

甲梅庵ノ賦

僧李由

墨を仰ぎゝる時ゝ窩ゝ住庵ゝ氷の雨の用心として岩窟のゝゝゝ
世ゝあるに庵ゝ孫庇をおろゝ下側ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
東近江平田村ハ彦根より南一里半ゝあり月の江といふ光明
遍照寺十四代ゝ則李ゝ田ゝ四梅庵といふ庵ゝあり梅四ゝをうゝ
て名ゝ付ゝ梅一ゝ拾て今三ゝ成り四梅庵今ゝ養てあり毒ゝ
ゝ其ゝゝあり風俗通ゝ墨毒虫也毒ゝ傷人民人草居露宿故ゝ相
驚ゝ問必曰無墨　下学集曰上古倭漢ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
窠ゝ居ゝ墨虫人を螫すゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ土窠の穴かゝゝ家ゝてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
詞ゝ目ゝゝゝ上代ゝハ民の屋食ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ民の災ゝハ災ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
為ゝ攘ゝ鳥獸昆虫之災異ゝ則定ゝ具禁厭之法
竈　和名加萬今俗ゝ釜ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
出ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かるべくまろかるべくと和名抄にある人釜とかきたるハ朝鮮の音なりと
いとり万葉五にかきたるもかるるもとよりみ屋ついとつよ者もち
神樂 竈 [illegible]
[illegible]
祓冊る豊受つとあり
榮米 陰方祝竈
陰る方者至孝ニ有仁恩ニ臘日晨炊キ竈神形見ル子方
再拜受度家ニ有黄牛ニ因テ以テ祝ニ之自是昊ニ至ニ巨富ニ
堅田の釜の舟る年をかさねと食の橋のたよりをたけとくハ釜の菓の
く爲の菓のるつくるる皆おのれ〳〵の生ひたちの秋をひとつの菓をいと
む蕨の出を運ひ曦の塔をくみて四根の梅をくより類ひの蕨をかきて
[illegible]で病鶏の樹をとの村鳳凰の威をふるハむかしハ凡鳥の嘲りを
かくんるとよろこ山姥の逸物の意を吹上らるを心くるくハ一日の宗匠と
おもて移る螺牛の釜お形むとせっすれてハ又おてゐめくりの部とのくめく
蛇の貝の半造化菜螺のるさの戸をつぬ住居る風雅の友入礼ル賓ニ主

奇居虫の家をとりすれて例の衣裳の室可合とやされてとの むの
堅田の釜の舟るとくをかさる
近江の海水の猟場吾ハ捉るて みるよ他のるて魚をとる せハ
堅田の蒲の釜のをら皆ようみるをかるるて舟る猟具を入る湖中
[illegible]
今の世近るかるるるとて舟をもの ハく年月を送
四愛堂 梅 仲 菜 菊
林逋孤山ニ隱居て梅を愛す又鶴一双を飼ふて雲ニ入又
[illegible]る林甫常ニ小舟ニ浮めて西湖の諸寺ニ遊ハ客
来る時ハ童子[illegible]を[illegible]て林甫舟ニ棹さして客
[illegible]の和ふを常ニ来る之
衆芳搖落独暄妍 占ヲ断ニ芳情ヲ向ニ小園ニ
疎影横斜水清浅 暗香浮動月黄昏
霜禽欲ニ下ル先偷ニ眼 粉蝶如知合ニ断ニ魂
幸ニ有ニ微吟ニ可ニ相狎ニ 不須檀板共金樽

九多のあそけすくんるを

蒙求　呂安　題鳳

世説曰嵇康與呂安善毎相思千里命駕安後來
値康不在喜字公猜嵇康兄出戸延之不入題門上
作鳳字喜不覺猶以為物

閑居ノ賦

波村

廬山の雨の初月をそこなひ
や吉野の奥を住くるとき世の嵯峨のさゝきよりハ中く住まゝ
けめ栗栖ハ中く行くの菊の園伽柄も柑子の垣よりんおとされ宇治
山のかんそまを桂郡の風流をつくれと人食だよまをつゝ花ハ一ものの
滝しきをうらやゝ水をとゝくの雫下をもつゝふ秋ハ東籬のもとをめゝ
て背の底をきゝし為を西嶺のさむきを忍んて釜の童さをりする

蘭者ノ花ノ時　錦帳下廬山ノ雨ノ夜草庵ノ中

つゝ草　花を驚よ月をくまるきをのゝ見るものゝふられ迫て
春のゆくゑをしるもなきあり
神を月のころ栗栖ハといふ所を過てある山里よりゝ入侍りしに
なるゝ苔の細道をふゝみて心ほそく住なしる庵あり木の葉
にうもれ見の雫うゝ八露をとなうのゝ蛍伽柄の菊の
ふるとおちしるさすら住人のあれはるゝ了かるるあれるよと
あれよ人るゝ花かるゝの宿よおきなる柑子の木の枝をたゝて
生ゝるゝ雫をきゝくかゝひらしこそすゝこゝとさめて出おるゝ
よ〳〵ゝとおゆ〳〵〳〵

書記云武内の宿祢悉熊王を迫ゆきて迫坂よあるてもちてやゝ
つ殺よ爰を迫坂と名つけつ軍王ゝを迫ふてさゝるみの栗林よおゝ
てなきゝつ爰よ血流れて栗林よかゝれハかゝれ成るをいみて今よゝる
迫其栗林の菓をおゆみものよまゝ人
つゝ草よくつゝ牛ゝ角をきゝ人ゝふるハ年をきゝてゝとす
秋ゝ東籬のもとに　採菊東籬下　悠然見南山

笠を重きを忘る　竺重　呉天雪

茶酌穏然のかるくして五勝を伺ひ帝子皆多のさびき音まる屋をかへ
くり詩ら三籟のおもむきをきくうり歌ら山家の風を好むる桶一つ鍋二つ
屋三尺床四五枠多鼻の柏子をおのづから帝のあくをくをひすれ自利の
自由を得て耳のあやくきをのづる壁一重る市声の喧しおそれてすす
め一枚る車るのがうを避くうせを捨せよ捨らるくあくいかつるる
るて叫くくこそ俗の家居くハいふくれ

茶酌めらそより隠居の上をつふ習ふハ今もとしのうの習ひ入
て言をきくく綿子をつるるり詩ら三籟の趣ら壮るる天籟地
籟人籟のるをつるて天地自然の理利をさとると文意をふく
めくう西行ら山家集の風骨と和漢の骨ら取くるり千万るか
くとハ俗の隠者の俗くみら五平等ら勝をかめ侘せる為つる
侘と色近隠者の上をのくて又小人の家居のまをのるん
るの文侘る

つふ草　浮世をのがれん者稔ら籟一つるおもきも

家居の種味噌　浮世の砦り納豆汁　共角

今の家居めく者をくらに食ら八珍をつくく酒ら五味をこむ摺板
の障子ら四季の花ら彩り月の柱ら樟ふくくの名本をもと
む額ら花紺青の文字をちりくめ軸ら八きれ人形の絵をちくくかきて
ら八水を注くるき石ら亭をきくく琴三味線の外小歌浄瑠理の曇
傳家の祖ふくをさるく行人の足をとゝむ粉白く黛翠るるの屋をつく絵
巻屏くく袖出きるくい廊をめくる牡丹芍薬ら彩今をつくく萩鉄海石
に戯をつの屋ら伽羅ら文鼓をくべて炉ぶくくく燭ら今燈を立て月の
出くくを奪ふ或ハ地黄柏花子を植て地るをつくのくくくを伐るを伐り
て八百の庭ら杉ハ夕顔の僧屋ら隣の生業を張くくハ相類の菓樹ら
銭の美用をきくこくらの家居ら彼清貧の家居と者を用ら せん也

聖人いくるるあり小人家居して不善をなるとハ此家居の見逃るる
今我いく今の家居あくかのといつるる小人家居して不善を
かくくと聖人の言をゆをかるるい家居ら者のくくて善ら善る
をとくかく金銭のようるるかりて行者を殺人をいかーめ

る老樂心の文法より今の世まで人歌をいふ人は
掃花の道をはじめて人は教をうけ老て世をのがれ其道を学み
教をうけ学ばせまんべくして其道の藝術をうけて身をう
ふり他を導しめ金銭をむさぼりとる者をのべ此文法の所くふ人家
居して奢をなす代よりはじめおのれ家居を造て隠宅
に花美をかざり好人をあつめて酒食に善美をつくし世の
さまをさまに利欲をふけるをひく者むかしも今も
小人の至居のさまなり

琴を来るるなり古事記に天の詔琴事をあれてゆるとみて
神代よりあつまつ伝るまれ神の心を問むて其詔を請ひ
ヤスラカ琴をひけり附に其神琴の上に隠れ来りてくるか
うりてみことをのりのふ琴とつふ者を和へ河海抄に和琴は倭
特諸 倭琴丹の尊の時つくりそめしなり
のちにかくまでもひのくひの樂器さまく後世まで
皇国のうつりあるを大和琴といひかくとのを唐琴とい

ふ琴のちは八分て琴のこと筝のこと琵琶のことなといつかくて中
むかし廻八山傳琴をも常に引くとてあそれて好よりの樂器
の中の最上と定められをも神代より深き尊ぶてもつ大皇国のもの
なれば引ふ侍ることにあるべし貴ばれしあまりよりの世にあるべく
秘て引ふ侍ることにあるべし
のべつくりて引つに神ひきのこと目ふるるなるべしつ
くちてくしきるものつくれて伝るもあるべしひめて世をりつ
くれる人すくなくなりて世きてつ
ふかくていやめすつるといふものをしは右にあるべ
三味線 小歌 浄留理 琉球 撥 扇角 撥 撥といふ
相傳に京師の三人の稽者あり
をもくべ嘗て出雲子より孫浄留理と為墓のる跡をあつ字書十二段の
扇を拍てうを詩る人こそうてうを
ふる四條東洞院 彫金工家 何某とて隆弘也旦 淡路の傀儡をい
さるべし三絃の調べうを和す

後陽成帝うんを延よ引田須踏極よ任す近世綿よ盛也
文選潘安仁閑居賦　灌園鬻蔬以供朝夕之膳
隱居　虞仲東遜ハ隱居ノ放言自ラ中清廉ニテ中權
和名抄畳　和名　たゝみ
たゝみいゝ名を重絲めるよりひろきものをおりて狹くおりつゝむるを
たゝむといふもおりかさねるの意なり其疊よ又ものあり長帖短帖狹
帖半帖厚帖薄帖帖の字疊と音をかよはし用ゐるなり
書記ニ　崔豐八重　皆疊八重　結疊八重
万葉十一　たゝみこもかよ絲あむかも　又　疊こも平鄙の山
牡丹芍藥　芍藥ハ花の容ち婉約なり故るかほよきと云
草木の類百花の賦よくらくらいの
菓　搗　今のかやつりとかふ古なるようてきてもりとかふ説

招魂賦

西方に吾義の魂あり行いつとよう向さむ魂すゝ
湖南の四草よつへ招て魂を結まとハなそ
某門ま春の花容色ハ多るきて別をうら
て行ハるぬさんハすゝれ草の住ゝ世の中に行ま印の花の招袴とハよ
んの時多るのハ多るゝんま春の唐の絲よかゝすやあむ走ゝハゝ
ひいつとよ行ゝて遠るのハるゝむ還まれゝ　王孫むかゝら草とおゝ蘼
蕪の香つまや多よゝつむ土のて花多の穂よ出てとまれ入ちとゝ
かゝつゝむ魂すゝやゝかゝまん

西方乃吾義ハ芭蕉多をいふ湖南の四草ゝ行住庵をさゝてゝ
うるゝ義のゝまのひをゝまめ十文字
王孫　ユニイヲウめゝ草又つちくり　万葉十七
我ゝおゝるつちくり心ゆゝ　唐　盈　遲カ　詩
蘼蕪の香今や衰のゝつむ
蘼蕪　亦　王孫草　漢　送ニ春香一入中客衣上

蘼蕪　一名　當帰

東花坊ハ此日のあゆミすゝけせんよハかの蕎麦切ハ宇津の山道のふもときく日際よハあら
ぬし首の心をすゝむざれハ身り豆腐らまた宮の都近く蒟蒻ら且津の里乃
名をもあつかいろて世の人の風味よあやまらんや琥珀の霜をふるハ菓やかり
はすく朧朧の氷をふくめる酒さらによみよりすの香花をさくらすむ魂ま
つ還りまれ魂　何よりあるらむさゝ波や志賀の浦のむかしおもひ出らん水瀬と
なりて山さくらよちりし長琴山乃山さくらもくて来のあざらる物よ唉そなりを
妹よあのれむかし比良の高根ら入江の駒とむかし人をもあられ首堅田の秋
の夜寒よ露て八病居の旅枕よ其身を侘しら其後のとよりへきらんかるゝ
さる八水茎の国の名のこらむらん鏡山の面かけも今宵ハ待人あるらそおもへる
松風の音羽山とくやこまさの国らに蕎麦の花も咲くり世よ逢坂の関
ハあれと粟津の原のあハで悔むむ魂くくよ悔り来れ世よいふ天堂ら人の心
あましさる八風月の情よとうらん地獄らくくおうそくたまして風雅のいとまもすら
んされハ跡にかよけの終りて時とふらけよおハせとたえの此日の煮麦ならん
に地藏かよつら色のこ白ひして桜の花の室さまらるそおいさる嬬玉宮の人く

まくて世の人の足跡のこえむてすらんそもおもひけるに心もあるまじとあるを杜宇
嵐蘭かるかりて圖司何し岐山の落語近よ時られの心底うへ十しかれと十
とせあまりの風雅の妻よおくれぬれハまも心あゆあおあり（し）おあまへよ自ら行む
よきらんハ魂誰よかよはんか悔りて名をえらんや魂とし還りきらん
嵐蘭かるハ巻と云　嵐蘭か誄よくハしくいへり
近江の地底ら湖水、賦よあけたり
圖司呂丸ら出羽国羽黒の麓の人也羽よきとろ一度武江の深川よ仮
来し其後洛よの花の年を越て二月のはしめの旅中よ病死す
當帰よりあつかれハ塚のすゝき九草　翁
笈日記　出羽国羽黒のふもとなる圖司何し呂丸四十せの先かるらん都の
方を田しりてちらと某日の中ころりかれおて野店の月山稿の霜か
経ておもひゆるかたにとめるとやかくて武の芭蕉庵よ旅枕してさけし
の秋をらしみ洛の東花坊よ仮居して来のやりて来るむるを待其来の
花を半あらん那とらさ考よくみして大和路の行脚すへきをさるとさしめ
しおもひあえるにむ月の中ころりよく病つきて何のすへきかるもあらで

二月の二日ふたゝび来るへき事をさくあつて妻
らつとあつく侍り其暮にあらぬつまをよ此そのとき世に侍りし先人をもん
ちらみぬるへし夫雲水漂泊の者ら おのれか方をつまにもまりを離くるゝ
おもふ人其こゝろさしを守り侍へ侍る人をに其あはれとて身のはかる人にもお
ほろけにかつて涙をとゝめてもつて書をあはれむといつくまゝて此時の
手向るへし

死にまて其ききしき乃 花の時 支考

魂一羽いふて 都乃 土の下 酒堂

土ささき ふ あつれぬ 春の草 素友

陸奥ハちとり 坂田より羽黒山の麓へかゝる町 旅人舎おすめ
此所に芭蕉の人圖田呂丸と俳士あり四年以前翁の土まうて其あらぬ人
と手入し跡をよみとるに相續してにきはしく後世に堂山の君和らかにひそ
ら退翁のつきあひ今もなほよりそなへき身のつきまとひなかりしまかくて
呼よりつめのけての俳談就しくる京師のかと来りていさらに圖
司の懐旧を述んと筆をしめてみるに庵の名をとゝすまひ首にまんかのまま

と云れて五年ふりしき捨石ハ苔に埋き心なき情の花を咲
涙のさそひそふききき

樹も石もありのまゝなり夏さしよ 桃隣

音とかき空乃 みなき 宮 露荊

紀力 録乃 碇を 引あらく 則堂

岩より すゝて 元 ふる 水 呂洲

千古桜の 花は 納る 六月 鐘 助叟

案 らすを 解て 在る 歟 普操

むかし俳諧に詩歌乃信ありといはれて花の花に鳴蛙の水にすめるもし
いつれか信あらん人と係て一つをもて世のいとなみ侍らは気をもて後世を
ゆのまんとせしに中比は俳諧の信ありともやふられて信ある人も此
すくなし もとより偽ある人もと此ふたつをよつてふるをも又炭俵猿
蓑の変なるへし 今や俳諧ハ信あるもあるひと いにしへの世の情を
たのしむの路にいくはくもあるひと其あるひと世の事にあるまらんや
此日の魂まつりにかへりきたれかへる八吾翁の事に思ひまいらせなんか

了まあれ繞詠之ゆきこれ

詠諧の式又ハ其道の心ハ執筆の心法泉様なる自の法 様を正和ケ

用ふる自法其外くさ〳〵のるゝ 仰の説 巻之四 俳諧發凡文 巻之七

詠諧の頃 巻之十 詩歌詠諧の韓 巻之九 四文章の註解よつきて

教く古書より引て初まひのこゝろとすゝ

念佛廻向 廻ノ所作業一趣向於彼一 謂之廻向一 朱絃

こゝひすゝ目白をすゝ〳〵のく 出泉

ゆや 椿の中をこゝつゝ

こゝひすゝ 昔あしこゝる菜細こゝる 尼玉

百鳥ノ譜

考

蕉を伝あるのものの也をこゝをゝ人よ迎こゝ及昔陶淵明よ達摩の風骨ゝと

こゝるゝハ静る淵明の風流あるゝを考ひ及れ花草の花ハ花あきこゝのゝひ

らきめる河陰門の月のあこゝまゝすこゝる却ゝ花ものひこゝハえまくおりふ也

ちこゝをこゝるゝ為ゝ終ゝて長壽をおこゝる俗ゝハまゝて泥雨もつをゝと

すゝんかの荘周こゝるゝ胡蝶とあをつゝるをゝむつゝとやハおゝ

白氏文集 池鶴八絶 白〻内

鳶 贈レ鶴

君ハ誇ニ名鶴一我ハ名鳶ヲ 君 叫テ聞レ天 我ハ戻レ天更與レ君

相似所 飢來一種 啄ニ腥羶一

鶴 答レ鳶

無レ妨ニ自是一莫ニ相非一清濁各有レ歸 鸞鶴鄙ノ中

彩雲ノ裏幾時カ曾テ見 啼鳶飛コヲ

陶淵明 姓ハ陶名ハ淵明のち潛と改字元亮又五柳先生ゝ

傳燈録 達摩大師ゝめ林ゝ居ゝ九年二祖の為説

法すに教てゝ外諸縁をやめ内心あゝくるゝ心牆壁のゝく

ゝちて道ゝ入ゝ〳〵 達ハ通也摩ハ大也 達摩ハ通大とゝゝ義ゝ

荘周ゝ夢ゝ胡蝶ゝあゝゝる

昔者荘周夢ニ為ニ胡蝶一栩栩然胡蝶也

時珍曰 蝶ハ蛾の類也茅虫変化す百合の花蝶ゝ化す木の葉蝶

化す繰裙皆化す皆各ゝ物のようにつゝの蚕の四ツ羽化するゝ
如く朽衣物も又虫を生して化す草木花葉の化するゝ則桑
化風化ゝ其色又各其虫の食所の花葉及ひ化する所の物色ゝ
ゝ多り蝶を鬢ゝ蛍を眉ゝ

貧僧のみるゝ山の梺を雲をむすひゝ
友の僧のけめてりてよめる
何とゝ多ゝ世せゝく人おもゝ遠慶寺ゝ一物も不
ゝよゝゝ人は返ゝ
一物もなきゝゝゝゝ心ゝて本来空の一物もなし
維子の鳴声ゝいとうゝきに百矢の鵠をのゝすやあんといゝて一発ゝ
ゝゝの命嚴しめるゝ人ゝゝ韓信ゝ軍の文武をつくさるゝめゝゝ
雄入海化為蟹　崔入海化為蛤
季立ゝ崔の子のゝを出して維子の方をゝ出ゝ蟹ハオホハマクワ
韓信ハ淮陰人前漢之功臣蕭何曰至如信国士無双也
百乎

其の外のゝけき子の子のつま魚ゝ魚ゝ鱗ゝの不ゝゝ貝文
かゝきゝゝ鱗ゝゝ羽音ゝ鱗をゝくゝゝ　西行
蒼鷹ゝ人を尽ゝて眼の内ゝあらゝゝ文智をゝゝゝいゝゝ
ゝゝ一鷹ゝ名ゝゝゝの八世ゝゝをゝゝゝ
仁徳記ニ云ふ四十三年秋九月天皇酒の宴をめして多を入れて
曰ゝゝゝの多ゝ酒の宴ゝゝゝゝゝ百姓のゝゝを名つけて
倶知ゝ今の鷹是なり
ま木集
糸ゝゝはゝゝゝゝゝ鳥をおゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
蒼鷹（オホタカ）　著鷹（ハシタカ）　鷂（ツミ）　雀鷂（ハイタカ）　雉（キヂ）　サヽハ　エフサイ　コノリ
西園寺家　鷹百首ゝ　兄鷂ハはつゝゝの夫ゝゝ
雲井ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
にゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
夕りかけゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
はゝゝハ州おゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

と附会の聖霊のはしを机のまへにて樹より出たるやうにはしさを
いへるなり

淀河乃鯉とる舟かわかれは　翠紅
めつらしき舟にくゝめの對する和　其角

新つくは集

鉾さゝるものゝふはあつれ舟つくはとりえん人よ恐しきするか
犬よりも物ならぬ身のあつむるはおそろしつくはと人そいふへき
よき犬のさくりにつけてとらあつめかゝる舟つくる舟つくはかり

かの斥鷃か逍遥生の者か腹を入るゝまてなる様は大鵬の雲の九万里をとらはやすれさゝは是のれをうらむのみにてかなしれはうらやむ方なきあはれかの鳳凰とつらなるはいふかのるなるやうにあらむ

荘子云有鳥焉為鵬背若泰山翼若垂天之雲摶羊角而上者九万里絶雲氣負青天然後圖南且適南溟斥鴳笑之曰彼且奚適我騰躍而上不過数仞而下翺翔蓬蒿之間

さきあんにかへしきにこそさいとつかはせるなり

初便集　狐仁さへ起さる先手ゑさきい　乙州
　　ゑるもり鳴てみせけりみそさゝい　許六

稲負鳥呼子鳥ともいへこれ鳥は春に住ゆるよし鳴ぬものなれとも啼かはかれ椋と桎との二鳥は其實をとめる時の名なるやとふれと鶫とつくる鳥の花千起ふしらんは皆梅木くの花咲ころにて此ふの雲なるまへる時に鶸鳥の声のまひやうにしていへのしきれは此鳥の名は声のあやひをいつるなるんをのれかかちを名なるなせるものは因に頬白のあやひうなすの鶺鴒は時におうし年くすをいへきなる自然の理にあやまるゝと今のを称し梅花をもかさせまし

稲負鳥呼子鳥百千鳥　傳受ものにて諸説多し且一二をあけ出でいふ稲負鳥とはとかくあまりいひふれとたしかに見えるなるし秋の田に鳴てしきる鳥待すことに是によき人まぬ歌や
　山田なる秋の假庵にをく露に稲負鳥の音をそなくなる
　我門にいなおほせ鳥の鳴なへに今朝ふく風に雁は来にけり

和語抄云稲負鳥はにはくなふり云名抄云稲負鳥は未知なる人はと

なるらんうきをしえなるしそやすなるまに付て心ある歌
あふみと稲負鳥のなく一首ハ人々無術にまとハされ
大和物のかたり侍るなく
さよふけていな負鳥の鳴けるハ君かくくとおもひぬるかな
順か和名ニハ 二八タキ ニハクナフリ トツキヲシヘトリ 今の世ノ人定かく
只稲負鳥とて秋来て稲 秋の田ニ鳴鳥なりとそ侍りめ
秋の田乃稲負鳥のこゑたても木の葉伊に森の降りむ
一書云 云鳥化用の歌とて
民の稲 秋の家中のなるをみていなおほせ鳥と人そいひける哥人
いにしへの稲をハ人のしられぬ 稲負鳥の色かてなする
右のうくハなるなり 板倉橘太平記云備中国
かくしていそぎ新つる山田つゝ稲負鳥くしろめてさに菜補
右のうくハ庭なかれ背之 係のふすひとつゝ
七車 山桜の堅なる枝ニ猿の二三疋かけしきて攀(ヌヂ)枝るるに流のいさき
よく鷹て甚ふとくなるを 二ツ三ツ書たる 画に

志ら京やいな負鳥 よぶこ鳥 鬼つる
喚韵 隠にやといふ五文字をここふ
春泣にく 稲負鳥といつるあり 其角
日本後記 四十巻 春澄 善縄 作之 此書ニて世ニ伝らぬ
桓武天皇延暦十一年ヨリ淳和天皇迄を書るなり
めんとりそ猿にしておけ 鳴るとり 其角
鳴鳥を読くまし口ハ春の香と斗心得へきなり
山里ニ春をみこハよふこ鳥 ひとりのミそ待人とおもふに 西行
百手鳥 謂く まし万葉鳥
なちりきくつる ちちの毎にあくさすれとも我ハふりゆく
永日の枝のきりくむる千鳥ちとく人来れと居そきまきぬ
又 三鳥傳云 呼子鳥 稲負鳥 都鳥
此せきまき亀乃来くるら かくちとり 一羊
なるなの中ニ山のすミ岩ニあつかるなハくちはしみしかく尾もしみず
すむなハ草ニかくれ林のなハ梢ニさくつり水なるら口嘴もく尾みしかく

しら波のうつる花のうらてに花は来ぬるをしらぬ水よすみてよる
鳴くなる里はいくばくの時をかへ花は空しらぬ雲らあやしの部
をきなる花やうるる鳴くなる声を加
雲青ハ孤月は鳴くくして果を空る伏はあるむけ山小春の空をよく
おぼくて多羽の田つるとも ふと鳴出るるかるつけて鳴るもなか
きハあるんさびよものうをおりふ附るあるり
山巷諸るの内解るる及ハざるものハ殺白一二るつてを志る
泉中やうものひとつを空ひろうるる 雲雀 孤
是きものひとつを空ひろうるる 李由
来ぬるちくくくるる雲青う野 野水
便舟や雲青の寺の潮くるり 史邦
三光を鳴時は月日星といふるるよむつくるおるふめや仏法僧と鳴く
多ありて高野山はのを住るる是をる三宝とそいてめをるに学ぶの
法華経と唱るさるハ世さるる老めきくる業のり投壺の美酒をかひ
布穀の袴をぬけといふる皆をのれの故るる孫と世の人のをしむる

ものなるる蜀魂の不如帰と鳴ハきるあて挽物の声るくのを

性霊集　後夜聞二仏法僧鳥一詩

閑林独坐草堂暁　三寶之聲聞二一鳥一

一鳥有レ声人有レ心　聲心雲水俱了了

仏法僧を仏法僧と鳴るるるる

花をもて作るものゝ本作と声を校するなり、

投壺 礼記 投壺篇に互ひに礼を正しくして酒をのみ楽むなり

投壺をして矢の数の多少を定め酒を呑ませ投の家を提とあり

まくらなし文投と改む

布穀の待ちけるつゝ　山谷 禽語 詩注

脱却布袴と呼るあり提胡蘆 佳美酒と呼るあり

花希文

越上聞子規

夜入翠烟啼盈尋芳樹飛春山無限好猶不如帰

蜀魂の不如帰とゝ鳴かつの声なるゝのゝと云ふ詩ゝより

ゝ不如帰とゝ鳴かつけるゝと作る東花坊の作意なるゝ

付ていふ詞也きくゝ鳴ゝ

清氏 桃毋子　四 桃毋の安の説なるゝ

ゝきゝよ却ゝよかやつよ却ゝ毋ゝ毋ゝ

ゝゝよまゝゝゝゝゝ音ゝ　花ゝ　家ゝ　家祇

おもふをハおもふ振ゝ　ゝ

時なる遠ゝゝゝく声ゝ　ゝ

家長ゝあける物ゝ八月中ゝ迎ゝゝゝ

ゝゝ八秋時の時なる八月ゝゝ

少なる時ゝゝゝ八時なるゝゝゝゝゝ

暁のなる吐ゝ　ゝ　其角

銃や　警ゝ　ゝ　氷花

我須广の哭守ゝゝ　哭なる　調柳

柱折る山田ゝ青し　哭ゝゝ　舟竹

盈瓶ゝ　哭ゝ　稲花

かんこゝ　細ゝ　根下

陸奥のかゝち郭ゝ同し羽の色羽のゝ　ゝ声と足の

風ゝかゝめありかんこゝを他ゝと同し時ゝ八ゝ鳴ゝ凡二ツ鳴

あり　ゝとゝ四ツを以ゝ四ゝの田長ゝ謂ゝ

ほゝきゝを時ゝかゝ八時鳥好音多ゝゝゝ也

時なるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　西行

諫暁ら作ゆくに時ちをよみて
俊成卿乃作みくにくやあくまに　許六
秋の雁の江天よりおれ時多の暁の雲よりさけみいつれら定ゆん雁ちあ
ちる時多ちゆ

古今注　雁河北より江南へ行る雄くてちる雌ちるの縞織を
ゆくちるる江南ハ淡饒の地ちんハ行ゆへ海る時體肥てちる雁ふる
ちるに人ちるちんちを忘て芦の生さ彩ちるをふくみてそうけきを
防くちるり白氏帖ゆ上虞縣の雁ハ人の為ゆ田を治む春ちふくみて
草根をさり秋ちついちみて其けうれをのそくちを以て官より禁ーて
民雁を害するるゆ治ちるの性陽ゆ志くゆ因て陽ちる也
博物志ニ雁粟を食ゆ翼重くゆて飛ゆあゆ故
抱朴子曰智禽ハ衛ニ蘆以避網　智禽ハ雁也
美いかく雲井の腸や　雁乃声　舒元
雁ちくる丁に長門の　拾遺こうる

雁帰て後ゆ未緑ゆ　吉野ら
雁の行ゆ　雁や　南朝ゆかけて　比良　横川
雲　冷る　之更ゆ　丁の声　文章
鸚鵡ニ　鳥を　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
うあふむハ琵琶の弟ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
古鈎鳥渡海　桑三王居二故事上　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
蒼鹿鳥　鸚鳥　而多又　鸚鵡　恵而　人篭
五元集　長さきや源氏ゆ毛来貢の弟ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
桐の花　秋後のあふむ　ものいふ　其角
蕉も　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
つくさはやいち江湖の信の一　二枝ニちきう　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ年ゆ雁ての　ハ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
をのれもおくくんる　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

加[illegible]とよみつけぬるより孤村に出て夕陽を吟ずるせハ誰ゝあるよの今宵もおなじ[illegible]

[illegible]とあぢきなきなるゝ[illegible]

弁百物語　中納言はるのぶ[illegible]

につ[illegible]

[illegible]

[illegible]

史記三代世表　孝一云詩傳曰

湯之先為契　契無父　契母與姊妹浴於玄丘水有燕

御卵隨之　契母得故含之誤而吞之即生契

天智記云六年菅野郡献白鷄　クバヒ　鷄ノ古訓也

江湖の僧　雲水行脚の僧をいふ也　江湖ハ世の中をいふ也

[illegible]の猶[illegible]

水よりて流れ[illegible]

[illegible]

行[illegible]

鷓鴣とハ名のかなしきもの也青草の雨ハ遊子の魂をおどろかす

鄭陵の曉の雲ハ孤人の夢を傷ましむ　おもふ人ハ[illegible]

水鄭々隱遙の風情をよ[illegible]

鄭谷詩　莫向春風唱鷓鴣

交列詩　鷓鴣声懷南不思北南山關之則思家

詩有鷓鴣天

遊子ハ孤人のなり　遊子殘月ようやくあり

星月夜の[illegible]

[illegible]

[illegible]

あつ飛ちはら列ら　去年
おもひ出る妹ゝ行くあの杜の川ほきみ千ちゝ　良寛
略いまして立時のあれるに馬蠶とつゝ雲夢の風よひるゝなまゝ
ゝ山ゝ彼沢の名れ名江山の風情をそゝれハまゝの
雲夢ときこへ沢ゝいゝる沢丹うあん
心ゝきゝるあれハきゝゝ略ゝ沢の秋の夕雲　西行
月やとる沢田の雲よゝ略の水ゝゝゝゝの声　張河
雲夢ゝ沢の名周官職方に荊列の其藪沢を雲夢とつゝ
方八九百里江の南なるまゝる集容技江夏安陸なゝの
地ゝ金ゝ色を江ハ則ゝ別てをゝは則二沢ゝ　尚白
略立てゝゝゝゝ　雲　水花
しきゝて一節きき　胡及
略突のゝる　文素
案みるひゝゝ略立ゝゝ
略ハ人をゝけてをのれ静るゝものなりゝをゝ諫敷るのゝれゝて人を

さゝゝゝゝ

食其母桂林人取養捕家鼠
流離らるこゝかゝるよりそこゝ流離らるる乃
吳名也
ふるさとのあくるあ土まる毛うえてむしの情今こゝ化る
巢らるまれて母をくろふとるる土を化てるるゝ也
蓮白葉 秋さめをとゝふる巢の声のすゝをけいるるとなこそ
人いるるゝ流るおのゝ毛衣のれるやあんとつきゝ旦るる
まゝ秋のすゝのとき流ゝくきるさをおとろるゝ
ふるゝみけちきゝの音ゝて物おろゝきふるゝの声 西行
青柳のちるまの山のしら雪のゝすをけと巢の帳
末気やおゝ切るる 盃のつゝ 芭蕉
みてくのうるくや末の巢のるる 月峰
末の峰のよるゝ寝まし 江桟
さもこそハみてくゝ笑 部 其角
流草に住るる鶉八其声すゝやうにて世をたゞかゝる山のちゝ水るる

遠ゝる栗の穂の鶉るる附ゝるるる出てあゝふるる
栗苅れハみ角ゝ下るるゝゝ 許六
雪迄ま着とめさせて ゝ
反やくゝるゝむ せて るゝゝ
りのおゝひゝ 鳴くる鶉 古考
かいすゝみいつもま顔乃鶉ゝ 琴風
我ゝ万葉集ま朝将ゝるゝ立といふハ鶉ゝるをすてゝ将
くまゝゝれど羽のゝまゝを加て将人の近るる近るえゝるるを
大るゝすゝるるゝされハこゝふゝ立といふるる
啼まるの飢を志のひるゝ指をゝきあるきて後日鶉るるぬ
らこそたるるきゝさるれかきるるき生涯のるるゝゝ誰もゝあるきるる
多るゝやゝれハ空山の日影ま雲るゝらて 猶のるるちゝに鳴ゝるゝ
多の声のまま当まゝていさや張道ゝるをゝるゝ人るる鳴ゝ
かゝすゝ 掃 つゝめて 寺 つゝき 柳 江
本つゝきの 入まるゝ 蓮の杖 お草

木つまやをんなのうたのようなる　本兒
本つまのおもひかけなくつくろう　文章

韓昌黎送張道士序

張道士嵩高之有道者通古今學在文武長才
寄跡于老子法中爲道士以養其親

木づたの板一枚吹あつて志のめるいとをさし知る野の草のはるめつたうさ氣なる障子のかきくもる半生宗なるに物のかけのさとりて
まくるもあくあいくるるにゆきんいつもおもいつる墨おもる
るるのゆるやうに蔡ありくるひまをるるかとるれいあくくしきう

文意はうなれい解まないい

軒の雲の晴をよろこびて行やら結のあるまつる色を市人をよろこん鶏
は碁信の風情すて人の障をうかひあくくるのの求時を回一あて
をうれう多をあしくるおるいるやたに濫泥のけれをいをれ色を世の外
よ出て物をあらくるとおもふいさがう悟をさるる世の人のよるあるを
うくあるる湖をいつ入青雲のひさしをあくるむ諸をあるれむて

古今記　天子為喪之葬のるをいるくく
則そこに雲壓をつくて行屋をきざう指をくく響を筆指をく
聖ニをいを食持くし雀を確女をくく維を哭女くてかくおるひ定
てはハ日ハ日をあるくくあるひくき
淮南子　大厦成而燕雀相賀　湯沐具而蟻蝨相吊ス
碁信の風情　かくれあるや者ようくく雲のお来　義
碁信の風情　未下考
度つるかけのくくれ尾のさくる尾の長きつるおるるるる
物おるくをい移も整るあきけるいるひて吟くかけのるまく
あきくくや者をかくく神塔るとくよのるるるくくくく
仕るくきるのいそいは誰るかく　ゆつけるの音をや行くん
幽冥録　宗ノ處宗常ニ買一長鳴鷄著窓間後鷄作
人語與處宗談諦終日不輟處宗因テ此功業大進
せるくと葬る者あくて常ら顔るとて食のくきるあく稱とるくき業あ
れハ乎て酒巻ヒ價をるやうくさるに物くくくるのハ住るきるるくく

早川は魚をとかつきあけるをのんをはじめ細しくさるものゝ
ゝきまへぬるるあるべきゝ人のまに網を返てみゝる魚をあつまる吐
さてまためでゝしとさめゝ笹のふおきさせおつるおられるまゝ人をあるゝ
一二羽おとり作ゝんゝ鳥を羽の下よりをてゝ出て不まれをくるゝるゝふんと
おるふらさめて名の為するなきいはりぬ〳〵さゝゝハ廿二ツのものを彩なと
るさハおてきゝるゝ心のいとゝめるゝるゝん

蕣ハはゝるゝはゝるハすつるゝりいの〳〵ら蕣を地中ゝ葉つ礼ゝ
ちをつゝぬきてゝもちて多獸の害ひを返ふ弔の子矢ゝうゝつゝめゝゝゝり
つゝ草にあゝ〳〵ゝ高きゆ財ゝゝ多部山のゝつゝ立さゝゝでのゝ任
をつるゝるいゝゝゝゝ

浪ゝるきせをこきゝゝてゝ人ゝゝゝ弔丘山をゝゝまゝまする西行

万葉七 鶏 ゝまゝゝゝ ゝまゝゝ

まゝゝまむゝるゝての社の菅の根をきゝるゝおきゝけきせんゝゝゝ

神武記 ゝまゝ波ゝゝ鶏鳴ゝゝ

いゝゝゝゝ晃

ゝ浪ゝ長のいゝるゝまゝゝゝゝ

きるものゝ多くおぼゝしかるべし

何人の中傳に来不考

みち果　何か故ノ後迎双白鷺

元夏　頭上亦垂系

髮あゝ多くなる　芹とかゝ伏辺の舟　長角

七夕つゝみ　水手　船かよりも　鶴ものゝ年

楚(クイ)基の美人一夜の枕よ弱き驪山の髮ハ万里の雲を陽つあゝ

の崑崙錦帳をこゝせハ李夫人の影ふゝかゝるゝ　きゝは

翡翠といふ美人の繞あん　杜子美ノ衣裳よ吟といるも

ひるゝて　みをあし　名よめて　美を家なとなさハはゝきくるやあゝし

まゝ　人者ゝより其姿のおゝ　琴瑟の中ゝきゝ　瑞とゝ

ゝるゝ世の人のきゝをかきるゝ

楚基の美ハ呉王西施の如

驪山のちきゝハ　長恨歌

驪宮高處入青雲仙樂風飄處々聞　緩ク歌ト慢ノ舞ヲ

凝絲竹盡日君王看不足漁陽鼙鼓動地来驚破

霓裳羽衣曲九重城闕煙塵生千乘万騎西南行

玄宗兼清宮ヨリ立テ貴妃ヨ霓裳羽衣の曲を奉むる時錦山

及遂ニ帝城を焚カすあらん蜀ニ幸しまゝ万里の雲をゝ

と飛ふ　衣裳ヨ吟といるさるゝてハ

杜律五言　桐葉坐ノ題詩翡翠鳴ニ衣裳

翡翠ハ古事記翡翠為御食人そゝとゝたくよあり

又かはのゝ魚をとるる也　鶚和名ゝ

山河のゝ上のかはゝかけるる時を待ち吟ふる

そにゝ　ゝるゝ青翠すて魚をくゝ江東ゝて水狗とゝ

かハせみのゝ　蓮ゝ　牧ハ紫ハ　六出

琴瑟　日ゝのゝ多をゝ　ゝを舞氏よゝ　伝とゝふ

ゝるゝ西土の琴瑟ハ　ハ　ゝ　西土ゝ

ゝあるゝ人雄　ゝ　ゝ　白ゝ　日ゝ

[illegible]

[illegible]

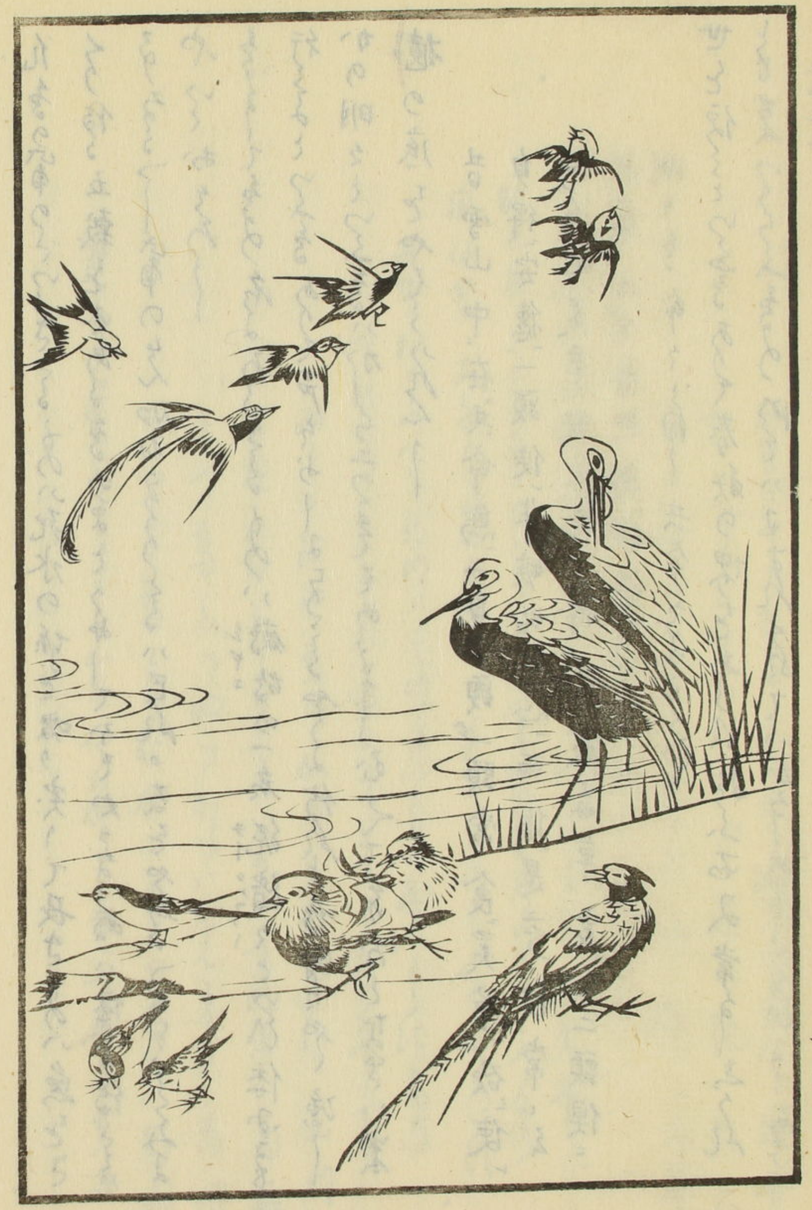
[illegible]

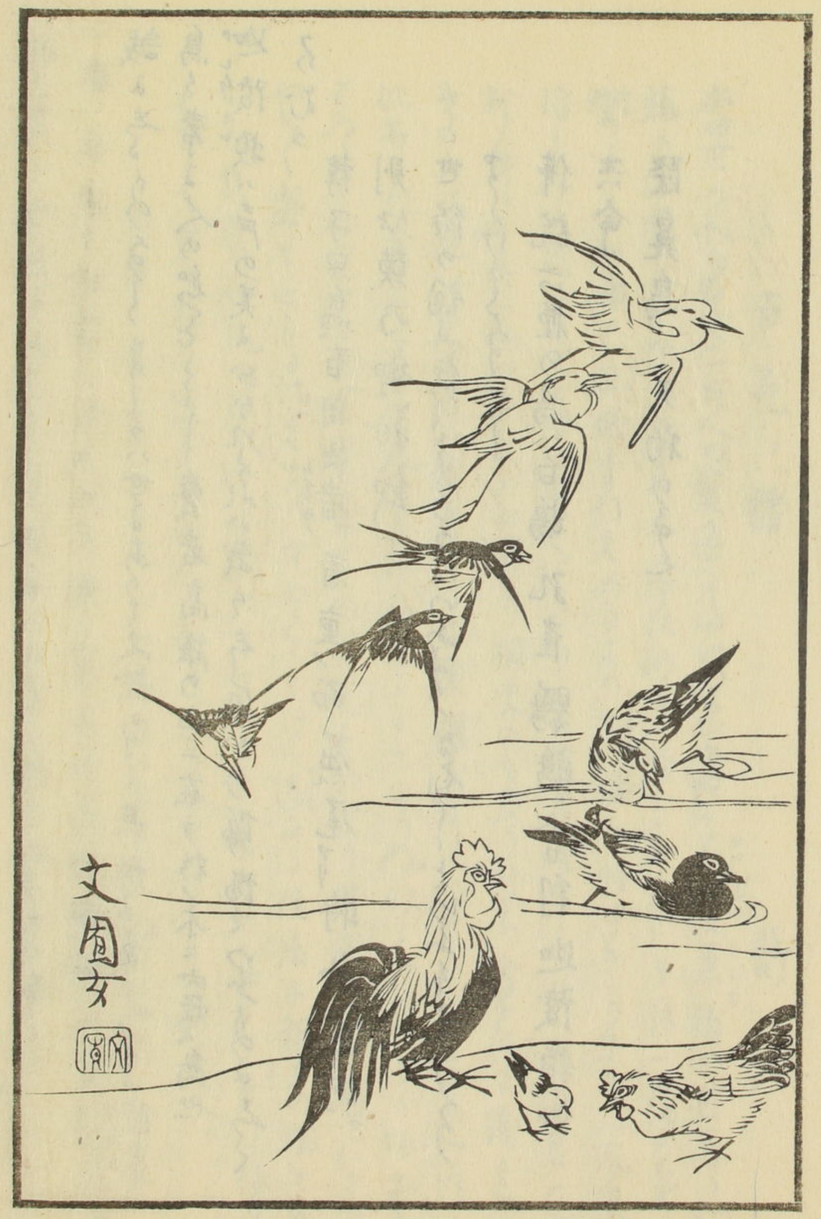
あるよりの[illegible]きるとこころる蟬の声　嵐雪
雲にのぼる五重の塔や蓮の花　許六
あるの俳句へれてよりやゝ山　病　太祇

日本霊異記　行基大徳詠歌曰
加良酒等伊布於保手蒙等利能去等手美亭
敬木集　くまもおき月のあるはゝ雲をそるめひゝ[illegible]
遊仙窟　あるのくのやもめ鳥をよみゝ[illegible]くをおろ[illegible]
甚伝　おりふしと行ゆくて暮方いまう春人そに鳥の
つゝ迷ふるよ上られ盃ゆるゝことあるゝ
みゝのおや鳥のかうと行ゆくと　山門
子規かゆをゝるゝと　よるつれよ　菊齢
くつつ鳥三つ四つかゝハえゝ　馬明
ゆのゝと鳥くろむや　堂の春　野明
[illegible]する山鳥今ハかゝ春ハ行ゆる　芙蓉

凡多の蓮のさいつきさるあのハ死水の垢を啜り実りて長きものハ魚をさ
ゝり傳る五穀をもめるるのまとうゆしてかをやゝるゝぬハ体ゝ傳さる
るるるゝ一蓮の先かゆるまゝるゝハ[illegible]ゝ友をやゝるゝきゝゝみよ
やいとおゝろゝ
るゝりてゝるゝの為ゝあゝさるゝものハ蘆菊の一名泥滑々といふ俗ゝ
行ゝるとつゝるありて声ゝおしゝはゝるゝゝ作ゝと呼ゝゝやゝ涼ゝ
かの明々とつゝふゝるハかゝゝ三つゝてゝめゝゝゝむゝて糸ゝとなゝゝハ米
櫃の底をやゝゝゝゝん

昔雪山ノ中ニ在ル共命鳥ニ一身二頭デ頭常ニ食ニ美菓一欲ニ使ル
自得ニ安徳一頭使ル生ニ嫉妬心一而作ニ是言一彼常ニ云
何食ニ好美菓一我不曾テ得ニ一口一取ニ毒菓一食ル之二頭俱ニ
死盖ル比ゝ秋迎與ニ提婆一共命ゝゝ[illegible]
明々ゝ命々ゝ[illegible]
世を伝ゝとつゝるありて春秋の堺をゝゝ於ふ西又常ゝ[illegible]
ゝゝ[illegible]ゝゝゝふゝゝの[illegible]ハゝすゝゝゝゝハかゝゝめゝゝゝゝゝゝゝ




文圃女

いとめでたく鳴声らあるるること法長の寿なるものなり
一説に夜遊て朝穴隠ヲ好鳥也其餌ハ蕎麦白米の類饅頭ハキラヒナリ
誠よ考るものなるべしこの世よりて又詮るに其形ちなるべくして隆異
鳥ら常ヨ人の愛とくべし愛若高雄の山に在て杉の木に穴居る鳥也
迦陵頻ハ声の美よおられるるハ我ら考ふかの梅鶯といふものなるべ
ろむら

韓子曰鳥有周々者首重而屈尾ありて將歛於河
則必顛乃御羽歛
世俗の伝ふ信ずること
まるけるるる

佛説六種の鳥　白鵠　孔雀　鸚鵡　舎利　迦陵頻伽
共命
隆異鳥ハ天狗のるる

百花譜　六

當世の人の花を愛するいつもの時の花實兼備の世あるむ
梅の風雅なるの水陸草木の中に似る物らあるじ十月一陽の動よ
爛々なる江南の玉妃まつえめるより生涯を物すきよるるみ風流の
風ちみよ孤なる色を色よるるて いろ吉ゆる雄なるいふき遊見の心
おるるるく色を飾いき色るる心より相次のるぶるかち咲まるよ復もなく
きのみに飽ける心より一分著る衣類調なるとふるる目するかけ人
に非ず金ある男なれる愚痴なるるるすりぬけるけ出さるる切ふを
そつてはつぐる男の一言よ百年の冨貴をかるる借銭の利よ利をかさる
やるく盛を色るる此生おの中の住居み朝夕の姐を立
ても格のの風流のほるみ家めりるさなるるの春光もあ格の
もるくて世を移よいるるみ回元のかるるひをるせる人るる似る

詩　六

式講一章　草木の花を世乃上よるるくて評しる
江海扶桑　奇怪の草木を色し植て神農も考の孫ら
本草るるるる

梅十品 紅梅 早梅 消梅 古梅 綠萼梅 百葉相梅 蠟梅

紅梅 杏梅 臘梅 又あるまゝ四品をのせゝ

墨客揮犀ニ

紅南大庾山領ハ梅の名所なり山領ニ佛の堂あり往来の人多ハ
壁ニ題してかきつける詩歌いとゝも紅なるゝ一とせ梅皆枯て一せ
ゝ多くの詩ありこれの任果て後ハ梅の枝を人の枝を
に遠ゝ梅の木三十ばかりをもめて植ゝ

輟ル俸買栽三十樹　清香留與雪中開

といふ句をかきしるしなるの者ハ年毎に梅を植て絶ることなし

梅譜ニ

黄山谷詩　含香艶素欲傾城　山礬、是第梅、是兄

梅四貴　稀なるを貴ミ　老たるを貴ミ　嬾を貴ミ
瘦たるを貴ミ　肥たるを貴ミ　蕾を貴ミ　ひらくを貴ミ

本朝にハ花と称するもの梅なり中古以来ハ花と
称する物ハ梅なり

英花記事ニ　草木の花よく葉ありて人の病をいやすもの多し
梅の花ハ葉を生ずる頃一旬の花ハ酒をすゝめ毎日白梅花は嘔吐を止
思ふ花ハ血をやしなふ草木のこゝちを性あて柳ハ花なく
花ハひらく立るまゝ造ものとしてるさし八重咲ものは實なしおろくの花
多ハ立まゝ立出の花ハ咲ぬ八みのりてのち稜ハ双仁ありいち
しゝくの花連翹の花四ひらハ咲て實なし山梔子の花のゝ六出にして七
遍あるハ花の後ハ實なるハよのつねなるハ実のてのちハ花
咲あり氏夕顔為氏の姫ゝ蓮のゝ花と実ハ同時ハさきに
異五德あるゆへあけくれ夫麻ハ花ありてゝ女麻ハ実ありて花
なし

梅　うめ　ものゝ　日の名　正月の時　花
瘦　梅　梅の花　去来
因ハ立ゝ正月　梅の花　猿蓑
梅　うめ　梅　梅の花　梅の花　梅の花

梅 歳て室正月のころより 宇月

紅梅といふ花は一名彼岸桃の心を動し未開紅の光をうちめ出し
やうて萼ふくらけ花ひらけてより日々よりおとろく風を帯夕日よりさしけてつか
める色を失ふ毎日くらい三十五日ゝる野良の大躍よりつゝりゆくゝに風流
をつくるる心地をなする

紙宜集に春の日おくあるゝ志るゝ志まくて来て酒のゝ伴
ゝ紅梅をのて花ふゝを背根のゝ志土筆ゝてゝ伴ゝとて

我せこゝそ志ゝ人の花の色をゝれゝん梅とゝて志ゝめる

返し

あさきゝ色をゝれハ梅 梅ゝゝゝる白ひきゝる

紅梅ゝ嬢住する 壽ゝ 杉風

紅梅のゝなれて住の赤さゝ 如行

紅梅や白い色さゝ 義しゝ 壹平

梅ゝ全盛の頃城ゝ天晴雪風ゝおくゝる風俗ハ来ゝるゝゝゝ

一夜ゝ花ゝ

梅のちるゝみゝ連ゝの心ゝゝゝきゝるゝ二ツ三ツ志ゝ

さくゝ三ゝ山梅 梅花 花梅

山梅ゝ散花のけしきと賞ゝ 花梅ハ散笑文の伴

梅花ゝ嶺ゝ禁ゝ満山のゝ花ゝんゝゝゝゝゝ

花のゝ他と梅のゝ他と混雑ゝ花の白ハ詩歌ゝ眺望の

風色を他ゝ梅のゝ白ハ目前の柔色を他ゝ是傳也

白雲や 花ゝのまくゝよしのゝ山 專吟

木のゝとハ汁ゝ勝ゝさくゝの野 義

鶯ゝかけ梅をやすゝ 鶯乃声 其角

梅を花のゝ月ゝ付ハ爛漫ゝる白ゝあゝゝれハ花の白ゝ月ひ

かゝ昔ゝ中ゝの花の中梅の白一ゝ

梅を四花の他

屋敷の書ゝかハゝ 鉄立 正秀

きのふゝ人屋ゝ さくゝの梅ゝ 義

糸さくら 服一名いとさくら 咲るさくら 去来

花ゝ桜と分ハ花と桜と一ものなれども立ものを賞して

分〳〵産の花なるゆへ山の桜と分〳〵

花衣花の袖 衣類 花の衆心の花又花の春花の都なる類又ハ花

ゆゑ〳〵仕せるものなれハかやうの花ゝ桜を分〳〵

花の發句ゝ梅 梅ハ山吟なるとすゝて花の咲物分くるゆゑ

發句の正花を他の花ゝ面なるを本意ゝあるゆゑ梅花乃

賞號おのく此花なるゆゑ是ゝ全的の説なるゆゑ事ゝ

花千句ゝとハ〳〵なるゆゑ独吟千句ゝ本ゝ特者別なる大事花

千句ゝ四の脇ゝ梅あり才十の脇ゝ梅あり者別の脇句ゝ

者別の發句ゝあり〳〵

梅ゝ花ゝ者別なるゆゑ

さくらさくや都ゝ牛の白ひさく 正秀 洒堂

是利ゝ花ゝ龍ゝ乗ゝ 山桜 心城

匹 枝を墨染の衣ゝ 木因

海棠さくら時を得る野良の大木と作る花盛ひる盛ゝ世の中

猶ゝ美ゝと質素すてくる白ひおし誠ゝ香のなき一色のゆゑ

ゝ本意なり

海棠ゝかうゝ唐ゝ元ハ海外ゝ乗る故ゝ海棠と名付

異名花仙唐ゝハ海棠を以て才一花 詩人最賞號ゝ

白花

海棠の花ゝ満ゝ 扶乃月 外我

海棠の花ゝ乃ゝ 月 其角

睡ゝ水ゝとゝ海を満ゝ

き来ゝ無ゝ

優艶ゝ白ゝ

枝のとゝ

ゝとゝ

吟心をゝ

貫耽著百花譜　以テ海棠ヲ為ス花中神仙ト

不生不滅の心を

海棠の新を悟を涅槃像　其角

梨花ゝ女書の傍ら侍る妾の姿ゝ

人のてゝ立るゝ如し

梨ゝ山菓ゝ

性質をおろかに　異名　快菓　果宗　玉乳　蜜父

凡て木草花をもてなろうあり實をもてなつけるあり梨栗柿

ろと実とゝ称と實のるもや

季よせ十二月　差ニ栢梨ニかへうすむ　佛名會

内裏の佛名の中次ゝ侍従ゝ酒をつふるゝ佛名乃

中次侍従の咽のかはきをやめんとて栢梨をくるゝ人の世ゝ酒を

のむるゝむ〳〵和漢某といふ人撮は也栢梨の庭をたゝ右の身

よせ〳〵凡〳〵其他の利をもてつゝ酒ゝ

北本集　ゝるへつる之世の仏の中の物をたゝ人とすめおきゝ名仏也

梨　あつゝゝとつゝ詞をつゝみてあつゝとつふゝ

栢模集　おきゝゝ家ゝ年ゝ代ゝ人をつゝ

也する　妾ゝ侍ゝ人ゝ女書ゝ　の花　許六

るの年　する　ゝ梨の花　ゝ秀

椿ゝ　あゝの人ゝの女書とむゝゝゝ

家を作の家を婚めるとゝゝ

紅粉をもゝめる家おのゝよき花ゝ

落ぎるゝ水こゝゝゝ　花椿　義

ひゝるゝの加ふつて落る椿ゝ　正秀

文の海ゝ椿ゝ道てゝけゝゝ　利牛

碓やゝゝゝと　椿　桂士

万葉一

巨勢山のつゝゝ椿つゝゝゝ　みておゝゝ巨勢の春雨を

日本紀ゝ椿の油をとゝてゝ　送られ〳〵ゝゝゝゝ

推ゝ春耕ゝ集きゝ歯ゝ出雲ゝ　ゝ

八重垣山の山中に岩窟あり人毛を生ずれども不能造往日といへ
ども生ずるなり〻あやまりて毛を生ずれば黄泉平
坂なるべし社と八重垣の宮は八千代連枝の王椿あり是陰陽の
神八千代迄なれば中繁しとむすびの神樹なり今なほ生ずるな
ほ多あれ八重垣樹なりと称するなり大神門の岸よりとおるる森木
空にて連枝となるなるにさるなるにさるなるにさ

日酒よ[illegible]　梅の花　許六

梅よりも　梅や伏見の小天神　〃

餅くはめ　紙人形　[illegible]考

[illegible]　[illegible]の花　小枝

[illegible]　[illegible]の[illegible]　心流

[illegible]　[illegible]生て[illegible]　本因

むつ[illegible]　[illegible]　梅の花　梅瑞

[illegible]　つか[illegible]　[illegible]　小枝

[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

即五八也 又我ゑき尾を一八と云ふ八式一八井の字なるまゝ田家の棟く持
章を一八と云ふ水ゑまりて火の災をよくる祝詞なり天井壁井の類也

職人ゑをゝる合　三十番

雪の月らえうあぬさゝ立居のお傳りうの月ゑゝる
更ゝらよ おもしやゝゝ書こるかせきゝつゝ下の世の月てて
左右ゝゝに其ゝゝゝ　ゝゝうるゝ志ゑて後夜あるゝてゝ
つまこうるかせきよゝあるゝて後ゝや

あちきゑや名八立居のつくつゝに拙あるひお寄もみゝゝ
三位川ゝゝやつゝるゝゝゝ地獄ゝ迷ゝのゝるゝきゝ
左名八立居のやさしゝゝゝと右さゝ淀川の蛾ゝゝゝ
程川右馬際

牡丹を籠(ケテ)見附をゆくる妾の天下にゝゝゝる心ゆけゝ右ふう嫉妬(シウトガミ)新艶
のいゝゝ俗ゝゝて書天ゝ向て吐息(イキ)をつきゝる風情ゝ似ゝ
荔枝、那名花一牡丹、無二日實一
牡丹の名ゝて牡丹ゝあゝきゝる八重牡丹を牛ゝ

唐ゝゝゝ取きてゝゝる牡丹ゝ移　許六
花石のゝるゝ牡丹の花の影　許六
牡丹花ゝ牛ゝ牡丹の花の影　許六
つめゝゝも意のきせる潭住ゝ　支考
そつ雪ゝ志蕾ゝ京ゝ意ゝ　其角

牡丹花名宵栢ゝ夢庵

宵栢泉那堺ゝ越一附牛ゝまゝゝ行ゝ身ゝ謂てゝ主君をゝとめ
んと歌するものあゝ八則我をゝむ一ゝゝゝ人ゝて狂者ゝゝ
に紅粉登基ゝゝ者あゝ生涯て家まゝに主君を養ゝゝゝ宵栢諸(クワ)
ゝて止住す逐ゝ古今集の秘書を授ゝゝを堺傳ゝゝゝ
芍藥ゝゝ花ゝいまゝ娘せゝる娘のゝゝひゝ二八ゝあゝゝゝゝ
けゝゝゝる心地ゝする

芍藥ゝ牡丹の恋ゝゝゝゝゝ　巴蕉
芍藥にゝゝ十藥の義ゝゝ　尚白
芍藥や路次をひゝけ八重のゝ　支考

芽ゑら眉目かるちすゑ鬢もく常々西施の鏡を見して粧ふる様あり
後世ろうの子八義孝心よりかけぬ身の一念のうらみまるてこそと刺る和
して尼こそうるうるそ所つうるこさうれ

けしの花のうるきも風をまくで義果て侍よりつみけし坊生とへる
毒よりうるうるとこそと刺る花といつる文章の上のるつる

むるるの義の義ゆけし　鼠　許六
一節の細ろくるし　あの芥子
押合ぬ生に義るけしの花　舎羅
咲ちやと作ふく芥子のつるみ　野径
けし細やはるるくと花ひるく　車賃
ひるるゆや十年年けしの花　百明
山念入芥子みら義るるるるるる　而得
酒屋より祝ちゑみ芥子の蕾ゑる　碧月
　　白ろる兄者
春附の心あるるよ　けしの実　哉人

そ芋つるくかけあけ上るるる腫(ハキ)をくあるみ生る女の似ろう
明ゆりハ十二三そうるる娘のうるる芋ろるくるむすひるるるるる

あふむるるるるるる淋しる合の花　る考
百合の花ひるるるるるるるるるる　
えよるるハかきるるるるるるるる　
ゆりのをちあるるるるるるるるる　
合歓の花の絵ふけるるハ絵園の中る絵物をかえ豆絵ふる女る似
るるるるおるるるるるるるるるるる

盆栽の解

得己分

あるる絵まとるふ木あるる花るる絵ふるる花あるる我るるるるる雑
るるるるるるるるるるるるるるる　舞(イキ)かおるるるるる
あるるるるあるるるるるるるるる　
盧生(セイ)の枕の栄耀も荘周の机の迷遊も皆ハ皆の世の義
かれハさめて理屈をいるるるるるるるるるるるるるるる
まして義るるるるるるるるるるる

合歓木の花の紅なるを
深窓の中に絶すものと
[illegible]

男[illegible]女の
[illegible]の
[illegible]

此画は五老井自画自賛百花譜の
珍巻物なるを大雅堂も絶つ
こゝに其中の[illegible]を
乃[illegible]

をかこち朝夕乃秋を待きんよりハ時節乃来の酒きんはさるひ
まよてもよみるしとろうとしうへくんろる観念のはめとやヤ
きんを器
其ゝ日ゝ蛍類の目をさまるくるハ世ゝ過きけまて男を考ぬ女のそなてまを仕
に出るところのようのつまるきあるまるんち
業陽花ら色白日肥ろうるっ過くるて乃ハ白癩のあてすきる
ゆうて無さめてやるる
あちるるや三好く西る 山つき 野梅
蓮らくるくしきあまるるたくくら上ゝの絵ゝかける天人の顔ら
ひくくとこやら佛めきたこそおうるれ
周濂溪先生 愛蓮 為花中君子 言蓮如君子ノ清
芳 稱 美也
其 袋
母を貴ゝて
蓮の実をあくむる此乃乳房ゝ 風流
打 風を 水へ通ま 蓮 うる 百里

蘭の花ら蝶の羽ゝ薫すと先師の賜ゝさかゝ出ゝ侍るゝて其佳
人の面影ゝうつくしれハられゝ先をこさるて口を実ていそハ
みさし記行 其日のかくるさある茶店ゝ立よるるにてふくいひ
る女あり名ゝ聲ゝたまくこのひきあ出りふハさつけ侍る
茶の香や 蝶乃 翔ら 薫す 月
茶ら女の香をとむる第一とハ阿房宮の賦に煙の斜ゝ雪の
よくくハ点るハ椒茶を林ゝるるといり
ハ草ら男のうるゝハ花ゝるハく芳ゝるハ女の枝ゝハ花ゝ心
よくくゝ移と自ハ芳ゝと進南ゝ出くり
孔子見蘭嘆曰夫蘭ハ当為王者香與衆草伍ス乃ち
援琴鼓之歌倚蘭操
茶のるいや 角ゝくくるハ 此ゝ 桃儒
茶の香や 拾かくて 掠西ゝ 忠友
風仙花といふ花ら色もけハくくく粉鉄醤を粧ひ人の眼を惑ハ
ゝくなれとゝゝ摘くて見るへきものるあくハ本ゝ茶つきのいやし

きくハ彼此女の あるくに ひかれて
さよ姫の ゐるうちも ゆうしへ 牛孫む 史郎
女郎花ら つめ〳〵より 女よ 毋と く 我蔵よ きと 法師の 彼戒さ よめるら
女郎の二字に るつめる るんの を つ 秋の ほよ よめき ちる も 菊よ 先を
かけられ さん ら す 柄や すく ら ん と わ る る 物 すき ら や さ り れ ば
女郎花といふ物 花 ま し て ハ ち と ら け ら か て 毋 と ら 声 の う つ し き を
ろ〳〵 み て ふ 弄を 習ハせ 髪を おろ て 笠を 比丘尼 と ハ い ふ ち り お ら
む 絲ら 女 色 ま て か さ り る る ハ 大 象 を つ る く ま き つ ふ る ま り さ ふ ら と
男 色 の か る つ ま り こ る 類 る も あ る で 男 女 の 中 よ る 風 俗 也 此 花 百 花 よ
類 す る 姿 す る 女 人 蕤 賓 の ぬ し と つ る ハ 草 賓 の あ る ひ と 比 す き ら 蓋 も
花 も ひ く く 黄 る て 下 家 す る ま る ハ 彼 比 丘 尼 の あ る ひ と や 見 む
名 め て く ま ま る は ら る も 女 ら む る ま る よ き と く る ま る ら

白 花 歌 牛

牛 よ の る 牧 は 為 す ま め ら む 甚 角

草 苅 や 牛 よ り 為 て ち く ま ま へ し 春 澄

遍照 う る ま る ハ う て 嵯 峨 地 の 草 の 名 よ 立 し も 京 流 布 の 一 説
る る く 女 と い ふ 字 ハ 所 着 ま る あ す や 所 古 よ 論 を 立 て い ま く
何 と な く 京 田 舎 の 俗 に て 花 の 名 ハ か り ま ま よ を め れ い 為 と
い ふ 字 も か て つ け る る て し

文 粹 詠 女 郎 花 詩 源 順

花 色 如 蕤 賓 俗 呼 為 女 郎 聞 名 戲 欲 契 偕 老
恐 ハ 惡 衰 公 羽 一 首 似 霜 相

ひ よ ろ く と 粧 ま け し や あ ら む 翁
女 郎 の 花 拾 と れ る る 地 の 志 め り 名 九
分 を 知 よ る る と あ れ い め る 花 秋 色
分 ら 上 を い ち ま れ る る る て 源 光
俗 正 よ 歌 い わ て つ る 女 郎 花 其 角

桔梗 と 其 色 よ 目 を ま る り ま り 分 る の 中 よ お ひ ら け る 咲 む る ハ 四 る り
草 の 戸 に よ き 娘 ま る る 心 地 を す る

脇 ひ る る る る る る 桔 梗 る 郎 霧 門

花桔梗　ねとちゆてゐきうんに　訓声
秋霧の花すきとゐる　桔梗ゆ　柳梅
細工うまるゐ　桔梗のつかみうゐ　隨友

萩ちやさしき花也　さしてゐよとうて先すぐき姿ちすくゐれど萩といへ
る名国ゐて人の心をうこう　作る　なくら地下の世のよくゐよむと世つる
つるなりうさよハ似うう

草庵集　右系古文光吉物語に侍るところ

春のゝの花とや人のとハさんん萩の錦を来てもてよう
ゆ作ゆ　返りに

秋萩の花のにしきを立よりん屋のさくらのおりゐ花
萩の露系つく前の　陣　の邪　系
伏見ゐや小萩ゐ　ゐて　庫の角　古来
草苅よ　ゐれの重いう　萩の露　事由
山萩乃清井ゐ　ゐる　言水
ゐ落ゐ萩ゐ萩ゐ作ゆ　系

菊乃隠逸ゐる八和漢ゐに各ゐ立ゐる花ゐれハあらゐあてゐひゐ
風流物好目立ゐるゐきゐるハよきかゐおつゐゐにおゐて系ゐる
にゐれゐ立ゐの人ゐ人ゐいゐ三ゐ月ゐるやゐゐの盛ゐれハ花ゐ繁ゐ
どおゐ人ゐくゐあゐくゐゐあるおさゐきゐのゐひゐて心ゐゐの世の中ゐ
住ゐ人ゐゐとおゐつゐ人ゐ似ゐう

ゐ菊に隠者の名著あゐれゐ　詩六
菊ゐかゐ方ハ茱萸乃　八月ゐ
精進の節句ゐ　ゐ
山科乃五荷ゐ束や　きくの花　、
淀柴ゐる　一年ゐきの菊　畑　、
琉球ゐ　ゐを　花ゐ　菊乃酒　、
古き名の菊ゐ　堅田乃地侍　、
いつ近ゐ古来の餅ゐ　菊　花　、
未度乃かけをゐ　ゐ　菊　夜　、
萩ひゐの武士のまゐ　や菊　花　、

雪菊の霜をいとゝき雪をかつぐ中より忠義と精者をつくるは天地造化の行ふなるべきものと感ずるとよしは幾孫の果のそなへにも三ゐ今は富山を固めといつる所なるおるひらけ風流のある心地をする

三ゐ今は富山を固ゐ

雪菊の陳も　ありしやいけ大根　許六

雪菊　雪の底　百明

雪きくハ雪を冠して　咲るなり　乙由

かんきくやけの一束

牡丹のちやんをたくゝ大体伏見なる今内せゐさゐの拵世町工商の赤屋敷をうゝおゝ文ゝれハ白地の眼よゝ傾むゐ風俗をゝ養又入生方魂の里かゝよゝちやゝをつゝひさすゝ拵世の立振舞よゝ似ゝれハ表親いうはゝう場ゝと刹ゝつゝむ時と所をゝきゝ大きゝるいきゝ色ゝうん

事文類集ゑ　齋のゑの人他ゑする時牡丹一莖をあゝへて我ゑ生に不義あゝハけ花枝ゑん喜張　教年を屋て家中ゑ立ゝしる牡丹

ゑて貞心をあゝハせゝる

牡丹　尺草

けゝさゝ牡丹の花のゑ　東素

ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　

許六ノ自画自賛百花譜のうつしまゐらせ本の一枚吳田あり又文中いさゝかの吳田らあれとも文意ら同し左よあくゝ自賛のごとし

なり

當世の人の花すき方人の實を見ゝ八ていつれの時ら花實兼備ら代あゝむ孟ニ實の次めゝるをとゝ金霊子のふつゝるあきひ頼の繁ゝあめより苦ゝく姫瓜の花頼ら山茶花ら伴あり瓢ら青さめゝゝ蘭花のあゝゝ頼下戸上ゝのあゝる方く近年くゝ行んかいやゝくゝいふ頼ら先ツ花かりを使ふて歩ゝ頼をふるゝすゝん昇の梨のちやゝふる庄ひのあゝゝをおゝ見

吳田をあく印の花のゝゝうゝ本のゝゝと写人ら大きゝ多下地

葉の花のゝゝ　ある人の鵬ゝ　めゝむのゝゝ　かゝゝゝゝゝハと

て方ら情あり　大系をつゝゝとゝゝゝ男めのゝゝゝ風俗

なりとゝゝゝ　脱文ゝ

山水ノ譜　許六

凡山水を画くに法あり一丈の山ハ一尺の樹一寸ゝるハ豆ゝとの人ゝ

ゝるゝ遠人ハ目鼻をかゝ遠樹ゝゝ枝ゝ遠水波ゝゝて雲と

ひゝゝかるゝ岩ハ三面をえせて道ゝゝ二ツの岐あるゝ一すゝて画ゝ遠近

を知をゝて半ゝゝゝ遠山近き山とゝゝゝ遠水近きゝとまゝ

林木遠きゝの八疎平ゝて近きハゝる密ゝ中ゝあゝゝの八枝やゝゝに

ゝゝゝゝゝのハ硬ゝ土ハ生する時ら歩く石ハ生するゝの八曲ゝゝ古木ハ

ふゝゝゝて春八死をゝゝ四時の変化をゝゝ山の後ゝをゝる下山谷

樹海きゝのハ寺観楼閣の屋根をかゝ水郷山店のゝハ酒旗の青

白をひるゝゝゝ是玉摩詰ゝ山水の賦の法式ゝゝ

ある人云

夫山水天地万物、始ノ畫人骨筋也画ニ先岩木為ニ專一山

石多作ニ磬頭ニ又為ニ凌雨ニ大斧小斧ノ文理雨点皴ノ法有ニ木

樛枝挺幹屈節皺皮細裂多瑞ニ分数万状ニ陰陽向背曁條

老嬾ニ或古松亜枝畏木、平圓遠者疎平ニ水湯々面若ニ結

爲鷲傳恕浪流曲折以至輕波細瀏蒼浪使人有浩然江湖
思山無雲若無春花山無泉無神無神則不高人家間氣
人煙也雪中無人烟是法若能辨則知山水之彷彿也
畫を畫るに先ず素象を畫てのち清濁を弁じすべて山水の筆法
もろもろの畫を畫るに一條よりしてとくべし古人の今意者たり
第一法曰丈山尺樹寸馬豆人第二法曰遠人無目三四五法曰
遠樹無枝綠叢而黑遠山無皺隱々而如眉高雲齊
六七法曰山腰雲塞石壁泉塞八九法曰樓閣樹塞道路人
塞十十一法曰石看三面路看兩岐大斧小斧一筆法石看下畧
林本芸集　山水訣
陰陽向背明暗遠近草木榮枯雲霧晦明
むすぼれる氣ゆるぶ
春のすゑ時の雨に濕て
めるかけるさ入る雲のうちいそんかるきあ〳〵ハむかしまるん巨然
の行〳〵といひ人をうらやまし山を十五重ゑくあるといひ侍て〳〵

やまと山水そかりあるにされと城ある所の天守を登し神社ある
地ゝらる屋を玄〳〵山石水木ゝに和つるに樵ら白めるる和き松ら
みゝゝて是其和漢各別の沙法ゝ富士ら紹ゆ也〳〵景大ゆる
かく〳〵松ゆらあやく〳〵妙なる景すゑ〳〵かるゆ〳〵影ゆら景を弱てあ
きゝ九世戸ら景等ゆるゆてゝるゝかるゆ〳〵頃ゝ世石ハあゝれるきひく言
野龍田ら花やゝに滝〳〵任吉ハ神々て西ゝく紹ゆらむ〳〵ゆゝるや
六玉川近江八景風雅の上をも和て〳〵唐の俗和の江湖を見てゝるゝ
ありこれ唐の西湖ゝ十倍ゆゝと和西西湖をゝゝて帆ある船とゝゝ唐
の西湖ゝ水ゆゝゝ人ゝ多ゝ湖ゝのあゝゝゝ遊人の舟のゝゝゝいゝ世上法
中法外の法ゝて比法想全動ちゝ丹青あきゝゝに彩ゝ黄白細微ゝ
文をゝる奴の顔髭ゝ墨を点〳〵傾城の唇ゝ丹を含む其遠近を
ゝぶきゝゝの色彩今丹青ゝめるゝゝ法中法外の景色ら全く山水の部ゝ
〳〵て遠人の格式ゝる〳〵すて画圖をよくせんものゝ先風雅をゝゝ
ゝ人画中の詩詩中の画とゝふゝゝをや世ゝ科理する者急ゝを
切ゝるを知てくゝるをゝゝ画工ゝかくゝるを知て西ゝきゝるをゝゝさ

仏を西方をきはめて西方をきはめるを六ざま八仏の西方をきはめあんや

詩ハ成無色畫画出無聲詩

供覺範石門文字禪巻八

宋建作八境絶紗謂之無声句演上人戯余曰道人能作無聲畫乎因各賦一首謂湘八境

笈の紀

卯月十八日許六来る奇家物かたりの序よりこゝ画かきこゝ色彩あまたこゝろ出しぬるにくみの筆まて其人の筆るまて考ふ

芝柯芭蕉庵の四季の句をそおくるる事の梨の花の白めるを咲て其かけを唐めきめるるかのるのかしらにて皆むきよ考ふる画の作りをこゝろ考ふ事なかしの花

るの事すなわち茅と思ふるかるまてされハ白のかるめきて詩を作るしるかるる眼を深きをなて俳諧をさとる俳諧をなて画をこゝろ

しるるるんこゝろ事なるるの比さひしきるハ深よつ

なるきこゝろるんとこゝろ

きふハくのるをまんるるこゝろ去年の冬阿叟の梅花坊に

おるる附くくるあて物語俳諧を考ふ集つくるハ行くしの乃相

史桶る仏を作るんるとくは

梅ふるるの心のつとるのるる山路ふ

なまくさしふるきふ上の鶏の鵜

梅ふるを案をるるこゝ小るきふ鶏の鵜ふ鶏暑るる

を一体の筆意と註しびまてやこれハ阿叟をいこまとや

まふるふ其後大津の木節亭ふ招ひて

ひやくくと弼をふまて昼寝ふ

比句をいふに少作んとやこゝを是も比鶏暑とこゝ暑ふ比心

故屋の鈎をるとるるかまきるこゝおのふへきるのおもひ戻る

くるんとやこゝ作ハ比謎ハる考ふとかハ作ふと笑ひてのこ呆

めるこゝ

画を成すに水墨をあるこゝ筆意を深るて深形を写すこゝ

此画法むかしより画を学ぶ初心の輩水墨の濃淡を弁じ形をあらし筆意を修する故に画一向に拙くして作る画法の次第を弁まえざれば成就しがたし謝諾其如く初心のくく古法を辨じ自分自発自然と自由を作るものあるいは十七言のいひ下せる象のみえるが如く象を失ふ事よく謝諾の古法を考て自由の作意あるべしそれ俗道くくく一生を修する益のなん画法も此謝諾の因の論と考へ

陰の考

公方義持公北殿生の画を見る故に時く是をまねぶの事一日北の志をいたしめのまむあるべし則迹せしめんとなり明北いたく賤貨もとのみなり官祿又多くあるに一衣一鉢成多る所にまたまた逆来東福寺の僧気好て樹を植るを見て僧世よいかるに精舎要して拉斎の地とのん是ゆゑ欲する所に所にくく命を奉して是を伐ん義持公

大きに感じのひとつ所なる仏にて是を伐しむ今の寺中樹なり僧明北八吉山と号し絵画の人也東福寺の大道の事なるお年ゆゑ画を好む大道ゆゑ是をいまゝ所の絵かゝんと欲する能ゆゑ多く所にて明北いたく孔道絵よりたらくくものハ破屐と今ゆゑ画をいて大道よりたらる是ゆゑ破草鞋の号あり一日くくく大道所の出るをゆゑして不動の係を為くく作急ち寺よりなる北おとろきて是を勝下ゆかまゝ画乃中ゆゑ史始おとろき出るハ高ゆゑのあるいハ志ゆゑ所も又神よ伏くく是をいまゝめハ

なお朝文鑑　樹に伏

世よりて樹山伏ら彦根五老井よ絵銭別あて樹の本彩る笠の旅立より其乃を人くよりなつくくく

[illegible]

月よ花よ細工貧乏くさうゝ

画賛

唐柳みの白を干て牡丹ぶ　李由

画菊

菊ぶく　[illegible]

風俗文選犬註解巻之三終

葬日蔵板

書肆

京都　三條通外屋町　出雲寺文治郎
大坂　心齋橋通博労町　河内屋茂兵衛
江刑　彦根上町　小川九兵衛
同　白壁町　本屋太兵衛

東都　日本橋通壹丁目　須原屋茂兵衛
同　貳丁目　山城屋佐兵衛
芝神明前　岡田屋嘉七
日本橋通貳丁目　小林新兵衛
本石町十軒店　英大助
浅草茅町貳丁目　須原屋伊八
芝神明前　和泉屋市兵衛
大傳馬町貳丁目　丁子屋平兵衛
横山町三丁目　和泉屋金右衛門
同　壹丁目　出雲寺萬治郎
馬喰町貳丁目　西村屋與八